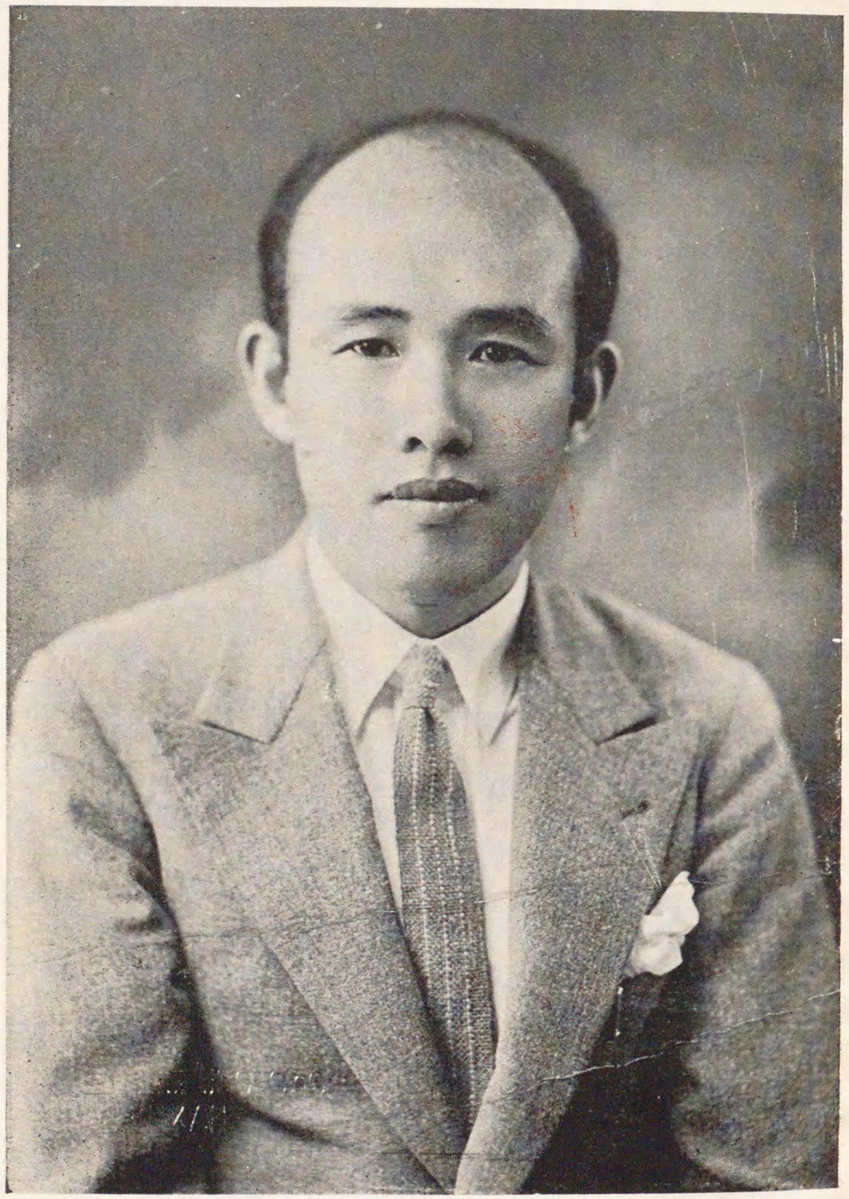
330.4
Ko718k
00696304

これからの經濟は如何に動くか

小島精一 著

今日の問題社版



著者の近影

330.4
Ko718k

國會圖書館
41.6.10
國會圖書館藏

696304

序

『これからの經濟界は一體どうなるのか？』――かういふ時局的な難問を突きつけられて私は大體次のやうな問題の取扱ひ方を試みた。

第一は、現にわが國の戰時經濟機構が、どんな風に施行されてゐるかといふことを、なるべく多角的に、且つ發展的な見地から考へてみた。

第二は、日本の大陸開發政策の發展及びそれに必然的に伴ふ國際環境の惡化につれて、將來の經濟工作が、どんな方向に新たな發展をなさねばならぬかを考へた。

第三は、かうした現在及將來の經濟統制治下に於て、わが財界のいはゆる景氣的發展はどうなるかを考へた。これには、海外諸國の景氣狀勢の研究が、極めて重大な關連を持つのであるから、米國を中心とする世界景氣の動向に就ても一應私見を述べておいた。

最後に、私は日本經濟界の今後の躍進的發展が主として、高度の重・化學工業部門の擴

充工作を中心として、展開されるものであることを力説強調するにつとめた。

日本の重・化學工業的發展の條件は先進列强のどの國と比べても、おそらく、唯一無二ともいふべき程の優れた强味を持つてゐるといふ事實を、資源の點からも、人的要素の點からも、技術の點からも、市場開拓の便宜の點からも、一々事實を擧げて丹念に説明することを試みた。

× × ×

要するに、私の研究によれば、日本が近き將來に於て必ずや東亞及南洋に於ける新興重工業市場の支配者となるといふことは、太鼓判を押して保證してもいゝ程確實な成り行きだと思はれる。

世上、やゝもすれば、財界一流の指導者達の間にさへも、わが重工業的發展が戰時經濟下の變體的、溫室的成長に止まり、やがては世界大戰後と同じやうな大反動的崩壞が襲來するのではないかといふ不安を懷くものが少くないやうだが、私はそれは全く時代錯誤的

な杞憂に外ならないと考へる。

今後の經濟界は內外共に、世界大戰後の經濟界とはその本質が歷史的に全く相違してゐることを知らねばならぬし、又、とりわけ、日本重工業の大陸開發的新使命の充分な認識を此際徹底させねばならぬと痛感するのである。

私は全力をあげて、かうした內外經濟界の根底を流れる脈々たる新狀勢の動向を説明するにつとめた。

× × ×

日本を中心とする東亞の社會と經濟とは、今や劃期的な大躍進を遂げやうとしてゐるのであるし、此の時代の新興的な波に乘つて、日本の重工業經濟は世界的指導者の一つに迄のし上がらうと努めてゐるのである。

戰時經濟とか統制政策とかいつても、歸するところは此の劃期的飛躍を、いかにして最も効果的に遂行せしめるかといふ一點を、最大至高の眼目とするものであることを、しつ

かり把握してかゝれば、その動向の歸趨は自ら明白となるであらうと思ふ。

ともかく、本書は、かうした見地から『これからの經濟界はどうなるか?』といふ時局的課題に、一つの具體的な樂觀的な解答を試みたものである。

昭和十三年三月

小島精一

目次

第一篇　日本戰時經濟の現在と將來……一
一、今日の戰時經濟の特質……三
二、基本工業の國家統制……七
三、戰時國策會社の統制……一〇
四、民間經濟團體の再編成……一五
五、戰時下の中・小工業助成工作……二三
六、中・小工業の『科學主義化』……二七
七、勞働力養成及び配給政策の缺陷……三一
八、過重勞働の危險……三三

九、産業統制と勞働統制との融合……三六
十、勞働統制の新指導精神……四〇
十一、資金の軍需的統制……四三
十二、輸入統制はどうなる？……五〇
十三、輸出促進の急務……五三
十四、綜合、縱斷的組織化の途……五六
十五、消費統制の强化……五八
十六、物　價　統　制……六〇

第二篇　國際情勢と新經濟政策の必然性……六三

一、長期戰と戰時經濟……六五
二、對支武器輸送の中心……六六

三、英國極東防衛陣の强化……六九
四、新嘉坡の前衛・香港……七一
五、地中海制海權の推移……七四
六、地中海を廻る歐洲の情勢……七六
七、日英の經濟的對立……七九
八、國防經濟充實の急務……八三
九、ブロック的建設計畫の新段階……八五
十、國運存亡の岐路に立つ覺悟……八八
十一、今後の經濟工作上の二大眼目……九一
十二、生産力擴充と反動來の不安……九五
十三、日本經濟政策の運命的な進路……一〇三
十四、日本重工業の前途……一〇六

第三篇　これからの世界經濟はどうなるか

一、世界經濟と今後の日本……一二
二、世界恐慌襲來說は修正を要す……一二三
三、國策經濟の時代……一二四
四、アメリカの景氣はどうなるか……一二七
五、米國景氣の轉落と世界經濟……一二〇

第四篇　これからの日本經濟界はどうなるか

一、積極策で一貫する今後の指導方針……一二六
二、新興重工業國日本たるの自覺……一三一
三、發展性豊かな日本重工業……一三三

四、財政、金融工作は心配無用……一三八
五、統制金融の動向……一四〇
六、貿易と金現送の問題……一四三
七、物價は上昇の一路のみ……一四六
八、跛行景氣の激化……一五一
九、爆發景氣は來るか？……一五三
十、多難な輸出貿易の前途……一五五
十一、前途は大樂觀のみ……一五六

第五篇　伸び行く日本重工業の雄姿

一、重工業は產業發展の鏡……一五九
二、資源貧弱とみられた日本……一六五

三、滿洲事變後は事情一變す……一七〇
四、南洋の豐富な資源……一七四
五、豐富且つ低廉な勞働力の强味……一七九
六、海岸にある工場の强味……一八一
七、支那市場の開拓は有望……一八三
八、重工業品の賣込みによつて日支關係は調整出來る……一八四
九、重工品の國際市場は浸潤の餘地あり……一九〇
十、いかにして輸出市場を開拓すべきか……一九三
十一、先進國は日本の進出に怯えてゐる……一九四
十二、數字から見た鐵鋼生產力の躍進振り……一九九
十三、鐵鋼增產五ヶ年計畫……二〇三
十四、滿洲に於ける增產計畫……二一二

十五、五ヶ年計畫の成否……二一六
十六、日本の鐵鋼業の國際的位置……二二〇
十七、機械工業の生產力發展……二二二
十八、貿易上より觀たる機械工業……二二八
十九、工作機械工業の現狀……二三三
二十、工作機械工業擴充計畫……二三七
二十一、造船界の盛況……二四一
二十二、自動車工業の躍進……二四六
二十三、航空工業の飛躍……二四八
二十四、わが機械工業の缺階はどこにあるか？……二五一
二十五、わが機械工業は國際市場で活躍し得る……二五四
二十六、中・小工業の機能を大いに發揮せしめよ……二五七

二十七、生産額から見た我が産業構成の變化……二六〇
二十八、輕工業中心から重工業中心時代へ……二七〇
二十九、米國の産業構成との比較……二九

第一篇　日本戰時經濟の現在と將來

一、今日の戰時經濟の特質

日本の戰時經濟を中心にして、最近及び將來における日本の經濟動向に就て、少し考へて居るところを述べたいと思ふ。

日本の戰時經濟は、現に絶えず進行しつゝある現狀であるが、今日のところでは、戰時經濟の體系としては、未だ極めて初步の段階にあるものと思ふ。それで、先づ今日現に實施されてゐる戰時經濟的の重要なる施設に就て、極く簡單に述べて、それが今後如何なる方向に進んで行くか、といふことを考へて見たいと思ふ。

戰時經濟政策として、今日、行はれて居る色々な施設中でも、戰爭前から、所謂生產力の擴充工作を遂行する爲に、その必要に從つて、實施されてゐたものや、當時、既に實行の用意が出來て、愈々、實行しやうといふ段階にあつたものが、この日支事變を契機に、

急速に實現された施設も、可なり多いやうに思はれる。

それで、また後に述べたいと思ふが、斯樣に今日の戰時經濟政策なるものは、必らずしも、日支事變があつて、初めて實施された臨時的性質のものばかりとは考へられない。その大部分は、戰爭にならぬ前から、準備が出來てゐたものと考へてよいと思ふ。

さういふ意味合のものであるから、日支事變が如何なる結末をつけるにしても、今日、採りつゝある政策は、大體、今後も大勢として、益々、强化擴大されて行くものではないかと思ふ。

なほ、これ等の點については、今後の日本の國際的環境、政治經濟的關係と緊密なる關係があるので、次に篇を改めて論述することにしやう。

そこで、今日採用してゐる所謂戰時經濟體制なるものは、大體戰爭を有効に効果的に、遂行する目的の爲に、國民經濟力を集中して、組織的に動員することが、その主たる目標であることは、いふまでもないことであつて、その目的に即應する爲に、戰爭前にはなか

つた軍需關係の產業力を統制する、軍需工業動員法といふ特別な統制施設が實行されてゐるのであつて、これに基いて今日工場及び事業上の動員に關する特別な政策が執られて居る。

これは、どういふことを內容としてゐるかと云ふと、軍需關係の工業に對して、軍部がこれを管理するといふのが、その當面の工作の內容である。

管理といふことは、工場を政府が國有に移すとか、或は、その經營權を官吏の支配の下に置くとかいふのではなくて、大體は、工場に對して、軍部が自ら要求する商品を製造させるに當つて、必要な各般の準備を有効ならしめるやうに命令をし、且つ、その命令が能く遂行されてゐるかどうか、特別な監督指導をするといふ程度の統制であるから、その經營の實權は、飽くまで、今迄通り事業家の手に殘されてゐるわけである。

だから、戰時工業統制の形態としては、極く初步的の統制であつて、もつと進んで工場の經營を國家自身の手に握り、或は工場を全然國家が買收してしまつて、國家が勝手に、

これを使ふといふ段階に入つて行くことが、戰爭がもつと進んで行けば、當然考へられるのである。

今日の事態の下においては、そこまでは必要がないといふ認識のもとに、叙上の初歩的な統制をしてゐるに止つてゐるのである。しかも、今次の管理令に對しては軍部は、特に『必要緊切な工場に限る』旨をことわつてをるし、なるべく、『民間註文に故障を生じないやうに取計らふ』方針をも明にしてゐる。しかし、必要を認めれば此統制はまだ〳〵強化、擴大されるのであつて、これを本格的に實施するといふことになると、軍需工場を經營して行くのに必要な原料とか、勞働力とか、勞銀とか、或は技術、工場の生産能力、手持ちのストツク、註文の關係等に對して、一々國家が立入つた統制をして、國家の必要とする方向に、完全に動員して行くといふ權限を國家は與へられてゐるのである。

二、基本工業の國家統制

生産力の擴充を有効に行ひ且つ戰爭目的の爲の配給の合理化を徹底化させる爲には、基本的な重要産業、殊に、軍需關係の重工業、化學工業といつた重要産業に對しては、部門別の特別高度の統制法が設けられねばならない。それに依つて、石炭、鐵、電氣、石油、肥料、工作機械、航空機工業、自動車工業等、最近では、又金の採掘といふやうなものが統制的に動員される。

斯く若干の基本的重要産業に對しては、特別法をもつて、いはゞ最高度の國家統制を實施してゐるが、その範圍も漸次擴大され、內容も次第に嚴格なものになつて來る傾向が見られるのである。

しかしながら、これ等の特殊の基本産業に對する高度統制といふものも、吾々の考へか

らいふと、今日迄のやり方は可なり緩慢な、自由主義的な立場から脱却してゐない性質のものであるといふ風に考へられるのである。

先づ最近商工省のやり方をみると、これ等の特別部門別に省内に夫々一つの管理局のやうなものを設けて、そこで政府が統制する。それには、エキスパートの顧問機關を作つて、所謂官僚獨善主義に陷らないやうに、うまくやつて行かうといふことが、考へられて居る。

さういふ政府の機關のもとに、全企業者を網羅する一つのカルテルを組織せしめて、所謂自治統制機關といふものを強化して、これを戰爭目的の爲に、國策的に動員するといふ工風を凝らしてゐるのである。

この强制カルテルの内容は、大體市場統制といはれる範圍に止まつてゐるのであるが、それを土臺にして、戰爭目的を有効に遂行しやうといふ立場から見ると、それだけでは、不滿の點が多く、自由主義的過ぎる遣り方であると批判せざるを得ないのである。

この統制方式を本當に採用するならば、原料を共同的に調達するとか、或は、これを合理的に配給する爲にも、カルテルがその機能を發揮する。或は、工場の生産力の劣等なものを閉鎖して、優秀な工場に集中し、更に、優秀な工場を徹底的に强化擴大して、生産力の充實を圖るといふやうなことが、當然、要求されて來なければならないのであるが、今日最も高度の統制をしてゐるといはれてゐるところの基本産業のカルテル統制に於いても、斯樣な進んだ内容のものは、二、三を算へる以外には見られないのである。

例へば、肥料の統制といふことが、最近非常にやかましくなり、政府は去る臨時議會において、肥料統制を戰爭目的に即應させるために、强化するといふ立前で、特別改正法を發布して居るが、その内容を見ると、今いふたやうな生産力を擴大するために、優秀な工場に生産力を集中するとか、或は原料を適當に配給するといふやうな施設は、全く見られないのである。

唯、僅かに配給機構の合理化といふ程度の内容を備へるに止つてゐるのであるから、戰

時經濟が段々進んで行けば、もつと高度の統制——即ち市場統制と併んで共同合理化事業の遂行を營むやうな統制が要求されねばならないものと、私は考へて居る。

三、戰時國策會社の統制

この强制カルテルと並んで、最近盛んに問題となつてゐるのは、國策會社を建設して、群小一般事業家ではやれないやうな特別の註文を、この國策會社にやらせるといふ方法である。

これは當然な施設であつて、ドイツ等でも、大戰中は所謂戰時會社なるものを作り民間の事業家だけに任して置いては、充分要求を滿足出來ないやうなものに對して、戰時會社を中心にして、生産力の擴充を圖るといふ方法を採つたのであつて、この國策會社の方策は大體、それに當る施設であると思ふ。

此の種の國策會社乃至國策化されたトラストは、どんな國家統制に服すべきかといふと、筆者は、嘗て世界大戰中、ドイツ邊りで盛んに採用された『戰時會社』型の統制が、他山の石として模倣されるのではないかと思ふ。

その統制の骨子となるものを展望すると、

（イ）主務大臣（及びその事務局）そのブレーン・トラストとしての統制委員會（エキスパート諮問委員會）があつて、國家的の最高統制計畫を指令し、立ち入つた監督をする。

（ロ）國家トラストが强制的に建設される（例へば合同航空機會社、合同電力會社、合同鐵鋼會社等……）。之が當該産業の管理主體乃至自治的統制體となる。その重役又は指導者の任免、建設及び營業計畫、價格決定、利益處分等は、すべて政府の國策的立場からの認可を必要とされる。又政府の監督官の周到な取締に服する。

（ハ）かくの如く、産業自治とはいひながら、國家の高度統制に服する代りに、他方では生産力擴充のために、建設資金の融通、補助金、免稅、軍部註文の確保、原料調達上の

便宜等種々の重要な助成的恩惠に浴するし、場合によつては、配當金保證等も與へられるであらう（その代り配當率の最高限度及び利益處分に對する命令權が主務大臣に與へられる）。

かうなると、民間企業としての自發的活動の面白味は、かなり減殺され、官僚化する傾向は免れないが、しかし、細大もらさず國家の指令を受けるといふ風な、窮屈極まる官僚的形式を考へるのは當らない。

實際は、そこに融通無碍の途も、やりやう次第では打開されるのであつて、戰時と雖も、その國家統制主義の成否の重大な別れ目は、飽く迄かうした統制技術の巧拙にかゝるところが多大であらう。

現にこれに關聯して、一言觸れて置きたいのは、國策會社といふものゝ統制の內容が、最近になつて、微妙な變化を見せつゝあることである。

即ち、滿洲事變直後における國策會社のイデオロギーと、最近、日產が滿洲國に進出し

て行つて、國策會社として待遇されて居るが、その日產が現に受けてゐるところの待遇との間には、非常に大きな內容の變化があつて、これを、今日の日本の生產力の擴充要求なるものと結び付けて、考察される時に、非常に興味のある問題を吾々に提供してゐると思ふ。

周知の如く、國策會社なるものは、重役の任命權は、政府がこれを保留し、事業の內容、營業方針等は勿論、進んで利益の配當等に對しても、政府は制限をする權限を有つてゐた。それに依つて、政府は、營利會社と違つた特別な半官的機關としての機能を發揮させるべく努力して來たのである。

これは今までの滿鐵の如き組織、內地の日本製鐵等の國策會社の統制の內容を考へると殆んど共通的に强力な國家統制を施してゐたものが、最近日產の場合に於いては、その統制の內容が著しく變化し、社長初め全部鮎川氏一黨のプライベートの獨占に歸して居り、國家は、これに何等容喙しないことになつてゐるのみならず、事業經營の內容についても

國家は殆んど鮎川氏の獨裁的權限に任して居るのであつて、利潤の配當の如きも、殆んどこれを制限せず、今後十年間に亘つて、資本的の投資に對して、年六分といふ可なり厚い利益の保障をしてゐるのである。

今まで年六分の利益保障といふことは、非常に稀れに見る所の厚い保護であつて、それ程厚い保護をしてゐる割合に、統制內容は、極めて寬大なのである。

これは、何故さういふことになつたかに就いて考へると、興味ある問題を吾々に提供するのである。

即ち、さういふ風にしなければ、滿洲の開發は迅速に進捗しないといふことを滿洲國政府、關東軍、日本政府が認識したと見なければならないのである。

滿洲國建國以來、今日に至る數年間において、推移して來たところの國家統制のイデオロギーの施設の內容に、大きな變化が現に行はれ、然も戰時經濟といふ背景の下に、かくの如き國策會社の實現を見たといふことは、日本の經濟界が當面してゐる生產力の擴充要

求といふものが、如何に切實のものであり、それを實行するためには、所謂國家統制の立場が如何に讓步しなければならなかつたかといふこと、日本の資本主義の現段階が如何なるものであるかといふことを、考へさせるに興味ある問題である。

恐らく、日產の如き形態が、北支那においても、同樣採用されるのではないかと思はれる。

さうなると、國策會社の國家統制上の一つの大きな變化を齎らし、相當大きな問題を茲に提起してゐると考へることが出來る。

四、民間經濟團體の再編成

なほ、この經濟機構に關聯して、もう一つ興味のある大問題は、民間の經濟團體を戰時經濟の名のもとに、統一的に再編成するといふ要求が、政府の方にも强まつて居り、民間

の經濟界の一部においても、非常に強くなつて來たといふことである。

これは蓋し當然の要求であつて、政府が戰時經濟の名の下に、特殊の統制を民間に加へる必要があることになつて來れば來る程、それを有効に遂行する爲めには、民間の經濟界自體の組織化が行はれてゐなければならぬといふことは、世界大戰以來、切實に經驗されてきてゐるところである。

しかし、その具體的な改造方針はまだ明確ではなく、現に、今日までのところでも、この問題をめぐつて二つの對立的な考へ方が現はれてゐる。

（一）吉野商相が抱懷するといはれるドイツ・ナチス流の產業別・强制組織化案がその一つである。

之によると、從來の經濟聯盟、日本商工會議所及び全產聯等を此際一應解消して、之に代るものとして、單一產業聯盟を法制を以て設立せしめ、その總括統制の下に產業部門別及び地域別に、同じく强制加入的の經濟團體を作り、それらを通じて『今後の國防經濟政

策の遂行に打てば響くやうな』民間協働工作を實現しやうとするものであるといはれる。

（二）之と對立するものは、鄕誠之助男を中心として經濟聯盟、商工會議所、全產聯等の巨頭連が自發的に計畫してゐる民間自治團體の整備工作であつて、現に經濟團體聯盟といふ新しい綜合統制組織をつくり、着々自治統制の具體化案を練り上げやうと努力してゐる。

之は當面の目標に於て、吉野商相案と大差ないやうではあるが、飽く迄英、米流の非法制的、自治的統制を狙ふものであり、ドイツ・ナチス流の國權による强制的拘束を避け、いはゞ『彈力性の豐なもの』に仕組まうとするところに特徵があるらしい。

さし當つては、おそらく、鄕男のいはれる如く、民間の自治機構の整備が急務であり、それが果して巧妙に有効に運用されるかどうかによつて、吉野案の如き强制的立法の必要性如何が左右されるものともいへやう。しかし、時局の發展性から大觀すれば、遠からず、何等かの法制的處置が斷行されねばならぬ段階に立ち入るであらうことも豫想されるとい

つてよからう。

たゞ、こゝにいづれの案を採るにせよ、かうした中央總括本部が有効な働きをするためには、産業部門別の下部團體が先づもつて充分改造、整備されてをらねばならず、そのためには少くとも、

（イ）廣義の同業組合的の機能――即ち當業者が協働して、市況及び技術上の調査、研究をするとか、勞働者や原料の配給の面倒をみるとか、その他一般産業政策上の研究や建設をするとか、要するに、直接の市場統制に立ち入らない範圍での共同的合理化と經濟化促進の機能を發揮すること。

（ロ）カルテル的の機能――即ち直接市場統制（生産、價格、取引條件等の共同規律）的の作用を營むこと。しかも、高度のシンヂケート的機能を營むこと。

この二つの要求を部門別の自治經濟團體が、自身又はその附屬する姉妹機關を通じて、有能に處理出來るものとなつてゐなければならない。この改造こそ、何よりの急務だと思

ふ。

現に、世界大戰中に米國の商工會議所が主宰して、自治的に組織した部門別の奉仕委員會（War Service Committee）の機能をみると、少くも次の如き重要項目を包含してゐたのである。

（1）當該部門の需給狀況の調査とその積極的な調整工作、

（2）當該部門への註文の公平且つ經濟的な配分、

（3）必要原料類の調達とその妥當な配分、

（4）工場別の生産コスト調査及び之を基礎として政府の價格公定への民間側の協力、

（5）製品の標準化及び種々の共同合理化、

（6）生産力擴充及び改良工作に關する具體的建策等。

周知の如く、米國では大戰前迄は、カルテル組織が禁壓されてゐたゞけに、奉仕委員會も、その方面の作用に就ては、餘程用心深い態度を採つてゐたやうではあるが、ともかく

非常時的必要は、是程廣汎な機能の集中的な發揮を不可避のものとなしたのである。

大戰中のドイツの如きは、勿論、カルテルの國策的動員を中心として、想像され得る各般の共同的統制の機能が、そこへ効果的に附與されてゐたのである。

即ち、戰時經濟計畫の立案に就ては、カルテルはその諮問機關として活躍すると同時に、其計畫の實行に當つては、すべて生產力の調査を始め、原料配給、註文割當、生產力擴充、改善等に至る迄、全面的な國策的活動をなしたのである。

翻つて、現にわが國で問題となつてゐる、經濟團體の機能は、どうかといふと、議論は、とかく、中央總括團體ばかりを對象としてゐるやうであり、たま〳〵下部團體を論ずるものも、單に同業組合的の機能の組織に局限して考へられてゐるのではなからうか。

さうとすれば、生產及び配給の直接統制者としてのカルテルは、別個のものとして新經濟團體の外に獨立せしめられるのであらう。そして、新經濟團體とは自然違つた指導者によつて、異つたイデオロギーで運用されることになるのであらう。

現に吉野商相が模倣しやうとしてゐるドイツ・ナチスの經濟團體の機能をみると、農業方面ではカルテル的市場統制も併せて行つてゐるやうだが、工業方面では、大體カルテルとは別個の存在となつてをり、主として、同業組合的機能を掌るに止まつてゐる。

しかし、此の經濟團體機構に就ては、既に、各方面のエキスパートから有力な改組論が出てきてゐるのであつて、シヤハトの如きは、その餘りに形式的・複雜化を非難し、もつと組織を單純化する必要を力說してゐるし、反面には、經濟團體自身が次第にカルテル的市場統制に乘り出して行く傾向も、實際的にうかゞはれるのである。だから、ナチス機構を移植するとしても、現狀のまゝの模倣ではなく、その缺陷を除去し、又、必要な積極的改善を加へることが緊要事だと思ふ。

そこで、筆者の見透しを述べれば、今後の（產業別）經濟團體には、同業組合的機能だけではなく、カルテル的機能も何等かの形ちで統一的に支配させねばならぬやうになるものと思ふ。

といふのは、かうすることによつて、從來の營利一點張りの獨占團體だつたカルテルの指導精神が國策化され、『自己本位の市場政策から共同經濟的、全體主義的方針への變化』が促進されることになるからである。

かうした見地から、筆者は、工業組合の存在と、その普遍化に極めて重要な意味があると主張したい。

工業組合は從來は中、小工業だけを對象とした國策的施設であるが、その主旨は今後は必然に全産業的に普遍化され、發展せしめられねばならぬと思ふ。といふのは、工業組合こそ、周知の如く、同業組合の機能とカルテル的市場統制の機能とを併せて包含する全體主義的、共同經濟團體の典型的なものだからである。

從來、大工業の領域では、カルテルは全然、私的營利の立場からのみ動かされるものとされてきた。しかし、中、小工業では工業組合が、國策的見地から、公益優先的原理の實踐者として、いはゞ新規の進歩的産業統制を追求してきてゐるのである。

ところが戰時經濟を契機として、大工業カルテルも正に國策的、公益優先的に動員されることが、切實の急務となつてゐるのであるから、今後は經濟團體とカルテルとを、別個の對立的イデオロギーで左右させるといふ風な、舊時代的、保守的態度をやめて是非共、工業組合の例にならつて、大工業も公益優先的な綜合組織化の途を進むやうに指導するのが緊要になるものと思ふ。

五、戰時下の中、小工業助成工作

戰時體制下に、各方面共カルテル、トラスト化が擴充され、大コンツェルンの進出が著しくなると、どうしても中、小工業者は、困難な位置に追ひ込まれる。

放任しておけば、原料の調達も、技術の改善も、註文の配分も、殆んど慘めな殘滓的かき集め以上には出で得なくなる。

もつとも、現在は、軍需註文が山積してゐるので、自然、中、小工業も、その好景氣に幾分潤ほつてゐるが、それにしても大資本企業への隷屬化傾向は免れない。

下請工業の異常な發展は、動もすれば此危險を激化するのである。即ち、之によつて、大コンツエルンは、自己に危險と思はれるやうな設備の擴充を回避して、一般的、臨時的な注文の形ちで中、小工業者に下請けさせる。軍部の注文が持續する間はいゝが、一旦それが削減されると、下請け注文も、突如として削減される。

かうして景氣波動の不安が、全面的に中、小業者に轉嫁せしめられるし、又、資本的融通その他常例のやり方で、下請條件は必然に極度にきりつめられるのである。だが、かうした傾向は、なにも下請工業に限られたものではない。

そこで、商工省では、かうした大資本的重壓を幾分でも緩和しやうとする見地から、中、小業者の工業組合強化を助成し、なるべく、共同自治的に大資本への屈從から離脱せしめるやうに努めてゐる。取引條件等も商工省や軍部が中間に立つて、餘り極端な切り詰めた

ものにしないやうに面倒をみてゐる。

その施設の一助として昨年の臨時議會で工業組合法を改正し、その適用部門を擴め、權能の充實を計つた。即ち組合員の債務の保證を認め、統制力の強化を促し、又統制事業を營む工業組合の强制的設立をなし得ることゝした。

又、最近商工省の發表した下請工業助成プランの要綱は次の通りである。

（1）下請工業は機械工業、金屬工業、木工業その他實行容易なものを選んで助成すること。

（2）下請工業は商工省が全國的に統制し、その發展も商工省が主導體として助成すること。

（3）工業組合の整備を前提要件とすること。

（4）地方廳が下請業の取引及び作業工程等の合理化に立ち入つて監督を行ふこと。

（5）地方間の相剋を緩和するやう業種の配分を注意すること。

（6）商工省に地方工業委員會を設け、之と緊密に連絡して地方廳にも同じ主旨の委員會を設けること。

（7）地方廳の指導員の養成等々……。

即ち、之によつて、組合と商工省とが連繫して、下請業者を保護すると同時に、その生産力の積極的な合理化と擴充とに助力する。又、注文の地方的配分を統制して、生産力の合理的發揮を計る等……。

かうした助成は、勿論、理論的には下請業の場合ばかりに限られてゐるのではない。一般に中、小工業の地方化を促進し、官民協力して、その合理化と積極的な能力の發揮とに努めてゐるものとみていゝ。

現に、商工省では、かうした中、小工業が地方化されて、『新しい工業組織として更生され、將來のわが産業的發展に一つの特異な積極的役割を演じ得る』やうになるものと認

め、これらを全面的統制の下に、大いに助成しやうといふ熱意に燃えてゐるのである。

商工省が、中、小工業の地方化になぜ、かゝる積極的熱意を持つに至つたかといふと、

（1）工場の地方化によつて、反つてコストの低下を計り得るものが、合理的調査、科學的研究によつて、かなり多數に發見されてきたこと（殊に交通、通信の發達、機械化、標準化の進歩、特殊熟練工の不必要等）、

（2）地方農山漁村は調査能力の不充分なため、案外有利な地方的生産條件を今日迄無爲に放棄してゐるものが多く、從つて、開拓助成の餘地が大きいこと、

（3）電力の地方利用が進んできたこと、

（4）國防的見地から産業の分散が望ましいこと等が數へられるやうである。

六、中、小工業の『科學主義化』

たゞ、こゝに問題となるのは、地方農村の遊閑勞働につけ込んで、低廉な賃銀で之を搾取することの弊害であり、かくては『農村の自主的精神をスポイルするばかりか、地主と工業家との結托によつて、農民は小作權を脅かされ、土地價格の騰貴によつて、二重、三重の犧牲を拂はされる』といふ非難がある。

だが、普通の都市なみの賃銀を拂つて、地方工業化をやらうとなれば、自ら可能な條件が狹められて、特殊の適地的のものに限られる。たゞ、組合と商工省邊りとのタイ・アップによつて、どれが眞に適地的であるかを充分科學的に檢討し、その地方工業化に必要な資金、技術その他の調達に努めることが出來るならば、そこに尙ほ、相當大きな新發展の餘地は見出されるであらう。

此點に就て、興味ある試みは、理研コンツェルンの最近の農村工業化工作であつて、大河内正敏氏が、その機關誌『科學主義工業』の最近號に連載されてゐる『農村の工業と副業』にその主張が明白に述べられてゐる。それによると、大河内氏は從來理研コンツェル

ンのやつてきた低賃銀目標の農村工業化工作が本質的にまちがつてゐたことを告白され、新に、『科學主義工業』に基く新運動を提唱されてゐる。その特徴的な點は、

（イ）農村工業が、飽く迄も農村副業として經營され、從つて、農村精神で一貫されるやうに仕組ませること、

（ロ）それが都市大工業のための部分品工業であつて、地方的存在が『科學的に合理的なもの』と認められるものなること、（氏の主張によると此種のものは高度機械工業の多くのものに發見される）

（ハ）從つて、支拂ふ工賃は特別な低廉のものでなく、普通工場並みを支拂つても、充分ペイ出來るといふ建前に立つこと、（作業の科學化の强調）

（ニ）都市の親元大工場が親切に農村工業の面倒をみてやり、原、材料の供給は勿論、その加工技術の供給、訓練を助けてやり、相互依存的にその發達を促してやる精神を發揮すること。從つて、國營工場か國策的な特殊會社が先づもつて、率先し

て、やらねばならない事になる。

もし、こゝに大河内正敏氏が提唱されるやうに、國營工場なり、特殊の國策會社なりが先驅となり、之に進歩的民間大工場が協力して、工業組合と提携し、地方工業的下請工業の『科學主義化』を助成することに乘り出してくれれば、その前途は相當注目するに足るであらう。

幸ひ、戰時經濟は高度機械工業の領域に大擴充を要求してゐる。從つて、その部分品の下請工業も、必然に大いに『科學的に』發展すべき機運にある。部分品の製造とその組立てとは、勿論、緊密に相互依存的でなければならず、殊に部分品工業の科學化、合理化は急務中の急務である。

商工省は工業組合を助成して、かうした積極的擴充の途を打開するために、懸命の努力を拂はねばならない。勿論、國營工場とか國策會社も下請工業の助成に努めるであらうが、一般民間の親元工場に對しても、腰を据ゑて、永い目で、下請工業の發展に助力せしめるやうに仕向けなければならない。

かういふ風に、中、小工業の救濟乃至發展を、積極的に促進しやうとするならば、商工省は勿論、今迄よりも、もつと遙に巨額な助成資金をこゝに注入する必要がある。單に社會政策的救濟といふ考へでなく、新興産業の助成といふ新見地から、善處しなければならぬと思ふ。

七、勞働力養成及び配給政策の缺陷

現下の戰時經濟遂行にとつては、勞働力の絶對的な不足（殊に熟練工及び技術者）が、その配給の不合理（一方に過剩で、一方に不足）と結び付いて重大な困難をひき起してゐる。これは、戰時經濟には必隨的な現象なのであるから、餘程前から充分な統制的準備が必要だつたのだが、今日迄のところ、未だ特別注目すべき施設はみられない。

もつとも、事變發生以前にも、例の日滿五箇年計畫の必要に刺戟されて、工、鑛業の熟練工を大量に養成するプランを、商工省や企畫廳邊りで盛んに論議してゐたのであるが、結局、大藏省でその豫算が大削減されて見るかげもない、貧弱なプランに轉落してしまつた。（原案は工業熟練工だけで約二千萬圓の養成費を計上してゐたのが、七十一議會を通過したものは僅々二百萬圓。かくして國家施設としての公的養成プランは全滅となつてしまつたのである）

政府が此問題に何故こんな冷淡な態度を採つたかといふと、種々の理由の中に擴充後の景氣反動の襲來を恐怖したことが數へられてゐる。さうだとすれば、筆者は、現政府の餘りに短見的、消極的方針を批判せねばならぬ。けだし、將來發生するおそれのある失業救濟の責任を回避して、現在、最も緊要とされる擴充工作を怠るものといふべきである。

今や事態は更に急激に發展して、支那事變の擴大となり、應召兵の增加につれて、工場及び農村の勞働力は全面的に、急激に不足に向ひつゝある。かうなると、熟練工だけでな

く、一般勞働力の補給と合理的配分とが、強力なる國家統制の下に積極的に斷行されねばならないことになる。

軍需工業動員法は、勿論その權限を軍需工業部門に對しては發動出來るやうにしてゐるが、今日迄のところでは、まだ特別の全產業的組織的工作が行はれてゐない。

此の問題の解決のためには、

（イ）作業の單純化、標準化、機械化等によりて、補給を容易にすること、

（ロ）國家的紹介所を整備して、配給の合理化を計ること、

（ハ）戰後の歸休兵の復職と、一般的な職業轉換の助成施設等いづれも、尙ほ今後の工作に俟たねばならないものが、多いのを遺憾とする。

八、過重勞働の危險

ともかく、勞働者が著しく不足してゐるから、どこでも無理な長時間作業と過度の緊張勞働とをやらせてゐる。

一方、生活費は漸く著しい上昇振りをみせてきてゐるのに、時間當り賃銀率は一向上昇しない。こゝに一々統計表をかゝげることは避けるが、實收賃銀の方は幾分上昇してゐる。之は早出、殘業等による勞働延長の結果とみられる。それにしても生計費の上昇には追ひついてゐない。但し、之は從來の就業者の賃銀が、このやうに停頓したまゝ上昇しないといふ風に解釋すべきではない。

好景氣になつてから新規の、低廉賃銀者を多數雇入れた結果、平均の水準が低下せしめられて、此表に現れてゐるものとみなければならないのだが、ともかく、勞働階級全體として考へると、賃銀標準は時代に逆行してゐるといへるであらう。

之は前述した過勞に伴ふ國民體位の低下と照應して、甚だ憂慮さるべき現象といはねばならない。(但し、一方には好景氣の御蔭で就業人員が激增してゐるといふ好もしき現象は

あるにしても)

一方、生產擴張を急ぎ、不慣れの勞働者が働く結果、どうしても、作業の危險率は增大する。これも統計が明白に示してゐるところである。

かういふ時期には、企業家は目先きの利害に驅り立てられて、とかく、大局的判斷を忘れ勝ちになる。しかし、かういふ過度の疲勞や長時間作業が、餘り長つゞきして、適當な休養の途を缺くやうでは、生產力の持續、發展には大局的にみていゝ結果がないことは、世界大戰中に先進國の等しく實驗したところである。

この點、爲政者も企業者も餘程愼重に再檢討せねばならぬと思ふ。

もつとも、勞働力が不足してゐるのだから、致し方がないといへば、それ迄だが、それならばせめて、前述したやうな機械化、標準化等の工作を計るとか、休養、療養施設を積極化するとか、賃銀も出來るだけ奮發して高めるとか——大いに眞劍に考ふべき義務がある。

九、産業統制と勞働統制との融合

もう一つ、極めて重要なことで閑却されてゐる點を、こゝに指摘しておきたい。

それは、勞働統制に就て、勞働者代表の積極的協力を殆んど全く、無視してきてゐることである。これは是非共一日も速に改善されねばならぬものと思ふ。

一體、産業統制政策が進展して行くにつれて、當然、勞働統制の問題が日程に上せられて來なくてはならないとは、筆者の久しい前からの持論である。現在では、産業統制と勞働統制とを一應分離して取扱はうとする考へ方らしいが、それには種々の不都合があげられるやうだ。

例へば、産業統制の主管省と勞働統制の主管省との分裂から、勞働者の利益の効果的な擁護と助成とが、犧牲とされることがないとはいへない。それでは勞働者の不滿が高まる

のみでなく、彼等の積極的協力を期待せしめることが出來ないから、經營能率の點から見ても甚だ遺憾とされる。

そこで、今後は企業者と勞働者との圓滑なる協力主義が、是非共、實踐されねばならない。その第一歩として、現に勞働者代表（社會大衆黨）の側からは、産業、勞働統制を融合させ、いはゞ産業勞働省なるものを新設して、彼等の階級的利益の助成を計らしめようといふ新運動が提起されてきてゐる。

それと同時に、産業統制法規には當然勞働統制に關する規定をも挿入させるも、その統制機關には適當の形で、勞働者代表をも參加させねばならぬといふのである。これには多分の根據があると筆者は考へる。

勞資協力委員會の提唱に就て日本勞働組合會議では數年前から次の提案を進めてゐる。

『（一）勞働統制

（イ）勞働組合法、團體協約法を制定し、勞働者に自覺と共に光明を與へ勞働組合運動

に一定の軌範を示し、その健全性を助長し以て産業爭議の最少化を圖り、進んで勞働者が國家産業に貢献し得る樣指導統制すべし。

（ロ）勞働爭議調停法を改正し、一般産業にも強制調停を行ひ、調停と和解に依つて解決し得ざる事件に限り之に最終的裁斷を下し以て勞資の利己的鬪爭を終熄せしむるため夫々勞働、企業、消費三者を代表する陪審員を參加せしむる産業勞働裁判所を新設すべし。

（二）産業協力

（イ）産業協力委員會を設置し勞働、企業兩者の自由的努力にのみ放任することなく國家も亦産業平和及産業協力實現に努むべし。

（ロ）産業協力委員會は主務大臣、地方長官若くは任命せる官吏を議長として勞働、企業、消費三者同數の委員を以て構成す。

但し委員會は全國的並に地方的、産業別的に設置すべし』云々。

社大黨では、右と同じ主旨の下に、去る臨時議會に次の提案をなした。

『戰時體制下に於ける産業平和促進に關する建議

雇傭者は産業奉公の精神に從ひ、勞働者は勞働報公の精神を貫き、戰時體制下に於ける産業平和を確保することは、刻下の急務なりと信ず。政府は速に戰時體制の遺憾なき實行を期する爲、左の方策を講ぜられむことを望む。

（一）政府指導の下に産業平和委員會を組織し産業平和を圖ること

（二）勞働紛議、勞働爭議等に因りて産業平和を害することなからしむる爲、政府は之が原因となるべき事象の芟除に努むること

（三）勞働報公を堅持する勞働團體をして企業家と共に、戰時國策の遂行に參畫せしむるの途を拓くこと』云々。

一體、今日では、軍擴工作は緊急動員の姿勢で進捗せしめられ、それにつれて、軍需工業の利潤も增大するを免れない。それなのに勞働者のみは前述の如き逆遇の下にあり、生活水準は高物價の重壓の下に、次第に下降を餘儀なからしめられてゐる。もし此の情勢の

まゝ推移するならば、必然社會的憤懣が發生し、延いて軍擴工作の障害となるを避け難いかも知れぬ。政府は一日も速に適切な社會立法をもつて、此の不安の芟除に努めると共に、勞働條件の決定に、なるべく勞働代表者を參加せしめ、團體協約の實を擧げしめると共に、全體主義の見地から爭議調停法を强化し、更に進んで、産業平和と勞資協力の積極的方策を講じなければならぬ。本來いへば爭議の調停は末の末であり、可能ならば、その發生を未然に防がねばならない。それには社大黨提案の如き、平和委員會は最も巧妙な工作の一つと思ふ。

十、勞働統制の新指導精神

しかし、殘されてゐる問題は、勞働統制の指導精神をいかにすべきかである。從來、わが代表的勞働團體たる社大黨及び日本勞働組合會議等は、階級鬪爭を土臺とする社會民主主

義を標榜してをり、資本家排擊に邁進してきた。しかし、統制經濟治下に於ては、一方企業家に對して公益優先の指導原理が要求されると同時に、勞働者團體に對しても、生産的協働團體として、國家の最高目的と全國民の福祉とに寄與せんとする新使命の自覺が要望せられる。かくて、勞資互に仇敵視せし舊時代の組合精神を脱却し、國民全部の中に階級の利益を確保する信條に徹底すべきものとされねばならぬ。

此見地からみると、社大黨及び日本勞働組合會議等も、最近は實質的には既に著しく全體主義的統制化の傾向を濃化してゐるやうにみえる。

そのことは、彼等の代表の前掲した主張の中にも片鱗が看取される。即ち階級鬪爭主義の拋棄から勞資協力による産業發展第一主義への轉向がそれであつて、おそらく、今後、非常時的（戰時動員的）統制の進捗するにつれて、かうした新傾向は、必然に彼等の陣營の内部においてさへも、益々支配的になるであらうと思はれる。

又、此點で數年來注目すべき新運動を起したのは、協調會の新産業福利運動である。こ

の福利運動の主唱者は前協調會理事河原田稼吉氏であるが、同氏によれば、

（1）わが國の勞働者は社會民主主義を清算して、國家本位のいはゆる産業全體主義によつて、新しい勞資協力を實現しなければならない。

（2）それには勞資双方共物質本位でなく、精神的融合を計らねばならない。

（3）事業主は全體主義に基いた指導者として働き、勞働者は指導者に信服しなくてはならない。相互に搾取と反抗との鬪爭關係ではなく、信賴と和協とによる産業力の擴充へのチーム・ワークでなければならない。

（4）かゝる和協精神を育成する方策として新溫情主義ともいふべき産業福利運動が擡頭してきたのである。これは國家の法律的强制などによらず、事業家の自發によつて勞働者の福利を促進する。それによつて勞資間の情的結合を計らうとするものである。

これを要するに『産業福利運動の基礎としては充づ勞資の協調精神を强調する。而して一方において事業主もその精神を具體的に現してやり、他方、勞働者に對しても産業全體

主義を强調する。これが新時局に對處する我々の理想であり、方針である』（社會政策時報による）——　といふことになる。

協調會では、現に政府と連絡をとつて、勞資双方の代表者を動員して、この福利運動の發展に努めつゝあるが、筆者は此運動が單なる舊溫情主義の蒸しかへしではなく、全體主義的新思潮の土臺に立つて、健全なる發達を遂げることを切望して止まぬ。

十一、資金の軍需的統制

産業統制に關しては、大體以上述べたやうな點が、注目すべき問題ではないかと思はれるが、これと緊密に關聯して資金の軍需的な統制が、當然要求されるわけで、その要求を日本においては、資金調整法といふもので、實現してゐる。

資金調整法なるものは、大體御承知のことゝ思ふが、日本銀行に資金調整局といふもの

を設けて、そこで國策的の要求に即して、他の建設用の資本に對して、國家的の統制を加へるのである。

つまり、儲ける事業があるからといつて、國家的に必要でないものに對しては、資金の使用を許さない。一方において、必要であると認められる事業に對しては、日本銀行、預金部或は日銀の統制の下の興業銀行といふ如き、特殊の國家的の機關を動員して、これが中心となつて、金融界の實力を國家的に綜合的に動員して、出來るだけ積極的に資金の調達を、面倒を見てやるといふ意味合の工作をやることになつて居て、これは着々進行して居る。

しかしながら、この資金統制の見地からいふと、今日日本で採つて居る方策は、やはり初期的の段階にあると考へて差支へない。何故なれば、資金の動きに對して、國家が指導をする、場合に依つては、指導ばかりでなく、命令をし、また場合に依つては、絶對に資金の使用を許さないで拒否するといふやうな權限を與へられては居るが、實際にこれを運用

する機關は、プライベードな個々の銀行及び金融機關の掌中に委ねられてゐるのであるから、實際の運用上には、色々な差支へが起つて來る。

民間の大銀行が綜合的に統一されてゐない爲に、一方の銀行には、資金が剩つてゐても他の銀行には、資金が足らないといふことが、屢々起つて來る。

剩つてゐる銀行の顧客先が、軍需關係の事業家でない場合には、資金が手許に剩つてゐても、それを有効に、國策的に行使するといふことが、可なり困難になつて來る。

一方において、軍需關係の顧客先を有つてゐる銀行には、いつも資金が剩つてゐるとは限らないといふやうに、資金運用上の不便は、今日の資金調節のやり方では免れない。

これは、資金の實際の運用は、民間の金融業者の自治的な統制に任されて居り、相互の資金を一つの機關に統一して行使するだけの進んだ統制機關が、備へられてゐないからである。

で、もつと積極的に資金調整を國策の要求に應じて、無駄のないやうに、動かして行く

には、民間銀行の大合同をやらせるか、シンジケートを作つて、民間銀行の預金を集中して、國策に順應して運用する必要が當然起つて來るのであるが、今日の資金調整法は、かうした積極的の意味の金融工作から見れば、可なり不滿なものであるといはなければならない。

勿論、これに順應する爲に、日本銀行が金融工作の範圍を擴大して、産業信用に乘出すとか、或は興業銀行が、社債發行の限度を擴大して、資本を吸收し、積極的に産業金融に乘出して行くとか、或は預金部を動員するとか、勸業銀行に特別な割增金附の債券を發行させて、資本を吸收することに依つて、公債償還その他の國策的金融に援助を與へるといふやうなことは、今日迄にもやつて居るが、今日の現實の金融逼迫から考へても、時局の要求するやうに、政府の統制が圓滑に徹底的には行はれてゐないことが判るのであつて、若し、積極的に生産力擴充工作を斷行して進まうといふのであれば、一層、徹底的な肚の据つた國家的の施設を行ふ必要があると思ふ。

それにも拘らず、日銀はじめ特殊銀行が、今日程度の金融工作で充分うまく行くといふ風に考へてゐることは、結局彼等がそれ程積極的に擴充工作を求めてゐないのではないかといふことを考へさせられるのであつて、この將來の見透しについては、相當興味ある問題を提供してゐるものと云つてよい。

では、生産力擴充工作を積極的に進めて行くといふことになると、どんな施設を必要とするか？　結局資金調整法の施設の如きものを中心にして、之を强化擴大し、特殊銀行の如きものが、國策的背景をもつて、充實されて、金融界といふものは、所謂金融國營の形に變つて來るのではないかと思ふ。

これは今日の段階に於いても、既に民間の金融界といふものは、半分以上金融國營的の統制の下に置かれてゐると見てもよいと思ふ。

即ち、預金はいくら集めてみても民間の金融業者が、勝手に自分の儲けに向つて、投資することが出來ないのであつて、金融業者の立場からいへば、既に、民營の特徴といふも

のは失はれて行つてゐると云つてよい。なるほど、形ちは民間の銀行ではあるが、その資金運用の是非判斷は、個々の銀行家の掌中にはないのである。即ち形は如何に民營であつても、國策に依つて規定されたところの資金調整局の緊密な統制の下に動いてゐるのであるから、最早民有國營の統制に服してゐると見ても差支へない。

これが一歩進んで、政府が民間の銀行に對して、國家的の要求に基いて、資金の積極的投資を命令するといふ段階に入れば、これは完全な意味での金融國營といつてよい。

ナチスで行つてゐるのは、さういふやり方であつて、形の上から云ふと、銀行或は金融機關の國營といふことは、やつて居ないが、實質的には、國營と何等異らないところの國家統制を行つてゐる。

これは銀行ばかりではない。

ナチスでは、民間の事業を國有に移して、所有權を國家が掌握する等といふことは、問題にはならないのである。

日本でも、今後國家統制を具體的に進めて行く上には、かういふナチス的な遣り方は、一つの重要な途を指示してゐると考へられる。

御承知の通り、金融業者といふものは、極めて保守的のものであつて、これを民間の銀行家に勝手に任せて置いたならば、國策的に必要な事業があつても、戰爭後の經濟界の反動といふやうなことを心配して、資金をさういふ事業に投下するかどうか判らない場合が多い。今日の段階では、消極的に手控へる傾向があつて、大阪等で實際仕事をやつてゐる人から話を聞くと、金融業者が、反動を心配して金を貸して呉れないといふことが、不滿の目標になつてゐるやうである。

それで、今後各種建設工作を積極的にやつて行く考へであるならば、今日において、餘程、徹底的に金融統制をするか、さもなければ、國家が戰後の經濟工作に對して、如何なる積極的の計畫を有してゐるか、若し、海外のマーケットが、反動的の狀態になつて、日本の商品を吸收しないといふ事態が生ずるならば、それに對應して、國家は如何なる善處

策を有つてゐるかといふやうな點について、豫め今日において、經濟界にハツキリとその態度を示して置かないと、今後の産業界の各種工作といふものは、必然的に行詰つてしまふと、私は考へるものである。

これは、戰後の經營の問題であると同時に、今日、當面の生産力動員にも、必要な心使ひなのである。

戰爭が濟んでから、ゆつくり考へればよいといふやうな、呑氣な問題ではないのである。當面差迫つた生産力の動員を積極的にやつて行く爲には、戰後の經營に對する國家の計畫を、ハツキリとさせて置くといふことは、最も緊要なことである。

十二、輸入統制はどうなる？

以上述べたやうな産業、金融統制に關聯して、貿易上の統制が、現に非常に難かしい問

題になつて居る。

國際收支のバランスを攪亂させず、爲替を維持しながら、以上述べたやうな軍擴的建設工作をやつて行かねばならぬといふところに、特別な國家統制を要求する根本的な原因があるのは冗説する迄もない。

これに對しては、政府は、去年の臨時議會において、貿易及び産業の調節に關する法律を通過させ、それに基いて爲替の統制だけでなく、色々の貿易の管理にまで政府が立入つて取締るところの權限を握ることになつた。また臨時措置法をもつくつて、輸入品の配給の統制、消費の節約等にまで立ち入ることになつた。

しかしながら、これらの法律を有効に遂行する爲には、色々の現實的な機關が必要なのであつて、その現實的な見地から云ふと、なほ政府の用意、決して充分ではないと考へられる點が多々ある。

例へば、この貿易統制において、最も重大な棉花、羊毛、木材といつたものゝ輸入統制

問題を考へてみても、この棉花、羊毛等の輸入を政府が統制するに當つて、如何なる機關を通じて行ふかといふことになると、勿論民間の機關であるが、それが、實際はまだ機能が、極めて不充分である。それでゐながら、政府の要求は民間側が仲々素直にきゝ入れないために、統制が圓滑に進まないといふ結果となつてゐるのである。

曩の棉花輸入問題の場合においても、政府は輸入シンジケートを作つて、一定の數量の輸入を一手に獨占的に行はしめ、その配給をも管理せしめやうとしたのであるが、當業者の反對に遭ひ、輸入數量は政府が統制する代りに、買付けは從來通り、當業者が分散的、競爭的に行ふことに讓歩したのである。

戰時統制の見地からいふと、可なり大きな讓歩であるといはなければならぬ。こゝにわが輸入統制の初歩的風貌があるといへやう。

ところが、ともかくも、輸入量を統制するといふことになると、當然その制限された輸入品の配給を統制するといふ問題が必然に起つて來るのである。

棉花でいへば、制限された棉花を如何に合理的に國內の紡績會社に配給するかといふ問題が起つて來る。

殊に、問題なのは、棉花の輸入の場合のやうに、國內消費向の棉花を制限しても、輸出向の棉花は、これを制限することは政策上許されない場合であつて、かゝる場合にはどうしても、更にその消費を國內向の工場と、輸出向の工場とに割當てゝ、統制するといふ難かしい問題が、發生して來るのである。

また、羊毛の場合の如き、ステープル・フアイバーの使用の割合を如何に規律するか、或は限られた原料を如何に有効に、工場に使用させるかといふやうな問題も、後から後からと發生して來る。

十三、輸出促進の急務

以上は、專ら輸入統制の問題であるが、之は同時に、輸出統制の問題とも緊密に結び付いてゐる。

吉野商相も述べてゐるやうに『從來は輸出のために輸入を割當てる』といふ建て前であつたのを、今後は、むしろ逆に行かねばならないのだが、之は相手のあることだから、さう容易に思ひ通りに進めることは出來ない。そこで、

（イ）輸出入をなるべく個別市場毎に均衡化させる努力（稍ゝ廣義に採つて、多角的な均衡化工作も含む）が必要となり、之は遂にはドイツの清算協定的なものに迄發展する可能性があるし、

（ロ）輸出を國策的に推進せしめる努力が、益ゝ緊要となり、國家の濃厚な保護、助成の下に一大國策的輸出會社でもつくつて、組織的ダンピング戰に迄乘り出すに至る可能性がある。

かうなれば、輸出業務も亦、も早、單純な私的營利事業たるに止まることは出來なくな

るのであつて、いはゞ『輸出の國策化』へ進むのである。

即ち、儲からないからといつて、輸出をやめるといふことは許されないから、國家の助成の下にダンピングを强行する。

既に國家が助成する以上、その統制權も强まらざるを得ないこと冗説をまたない。

（ハ）國家は此の輸出助成金を一部は國内向産業の負擔に轉嫁せしめるであらうから（現にドイツはさうやつてゐる）國内向價格はそれだけ高くなり、海外向價格との鋏狀差は益ゝ擴大されるやうになる。（現に最近でも日本の物價は國際水準より二、三割々高となつてしまつてゐる！）

此の組織的な輸出促進の見地から、今後に一大問題を提出ずるものは、新興重工業品の部門であつて、これは戰時中こそ、輸出どころの騷ぎではないが、なるべく早く、組織的な輸出促進機關をつくつて、國家と緊密な協力の下に、海外市場の開拓に乘り出す用意がなければならない。

わが輸出增進の將來の擔ひ手は、此種の重工業及化學工業品の部門に外ならないのだから、當業者も政府も、此點には餘程、特別な助成工作をする決意が緊要であらう。

周知の如く、此部門は資本輸出と結び付くことによつて、初めて海外市場の開拓に成功出來るものであるだけに、助成的手段も輕工業の場合とは著しく相違したものとならねばなるまい。殊に長期信用（一及保證）の國策的機關を整備することが、急務中の最大急務であらう。

十四、綜合、縱斷的組織化の途

要するに、わが國の貿易統制も次第に國策的機關に集中化され、組織化され、國家の直接の統制の下に國策的要求に順應して、動員されるやうな高度の管理段階に迄、漸く立ち入らうとしてゐる。

それにつれて、一方では國內の產業統制のカルテル的機構も益々高度化され、强制化されて行き、その國策的機能を力强く發揮するやうに要求されてきてゐる。

そして、將來は、此の貿易と產業との兩部面の統制が、相互に益々緊密な連絡をかためつゝ、いはゆる縱斷的、綜合的統制への途を進むものとみられる。

機構上の進化の見地からみれば、產業カルテルの組織の中に輸出入の機能が包攝され、かくして、單一縱貫的カルテルの結成に迄進むのが、大勢的な見透しといつてよからう。

既に今日に於ても獨立的な中間商人からカルテル隷屬の御用商人（いはゆるコンミツション・マーチヤント）への轉化の過程は相當顯著に看取されるところであるが、これは時局の進展に伴つて、益々持續發展せしめられて行く運命のものであらう。

かりに、產業カルテルと貿易機關とが、形式的には、相互に獨立性を保持する場合にも、內面的には、緊密な相互結合の紐帶が形成され、縱貫的、綜合的な統制政策が打ち立てられるに至るのは必然の途であらう。

問題なのは、かうした綜合的な組織化が、果して官僚化の危險を回避出來るか、どうか？　又、組織の内部に殘存する中、小企業者の立場を合理的に擁護出來るか、どうか？　更に、獨占的價格釣上げの危險から消費者を擁護出來るかどうか？　等々……である。

十五、消費統制の强化

以上述べたやうに全面的な統制强化をなすにも拘らず、これだけでは、まだ〳〵充分とはいへない。殊に外國の製品や原料類の輸入の統制をすれば、必然的に國内における供給が制限され、一方においては、軍需關係品の大量の需要のために依る物價の騰貴が、加速度的に發展して行く可能性がある。

若し、これを自然に放置すれば、物價の暴騰から惡性インフレーションが急速に招來される運命にある譯である。

そこに消費節約の運動が、重大な一の役割を占めて來てゐるのであるが、政府が今日考へて居る消費節約は、大體戰時關係に因り、勞働者の懷ろ具合が良くなる傾向がある爲にその購買力を餘計に入つて來たからとて、そのまゝ無統制に消費しないで、出來るだけ節約して、國家の必要とする公債の買入れをするとか、或は、銀行の預金に廻して、產業建設の資本として、働かしてもらひたいといふ程度の極く微溫的な立前の消費統制であるやうであるが、こんなこと位では仲々相すまぬやうになつてくるものと思ふ。今後まだ數年間は物資不足時代がつゞくから、需給の間に大きな喰違ひを生ぜしめないためには、餘程購買力を徹底的に、國策の必要とする方面に統制しないと、惡性インフレーションの傾向を到底避けることが出來ない。

この事は、一に政府の今後の生產力の擴充、軍需關係國家施設の增大といふものを、どの程度に考へてゐるかを判斷する一のバロメーターともいふべきものであつて、今日大藏大臣とか、日銀總裁が消費節約につき、それほど徹底的の要求をしてゐないといふこと

は、それ程、國家的施設が膨大なものにならずして、喰止めることが出來ると考へてゐることを反映してゐるのではないかと思ふ。しかし、客觀的事態はそんな呑氣な考へ方ですみ得るかどうか、大なる疑問がある。

若し、徹底的に戰後の擴充工作をやる、或は、國家施設を積極的に行つて行くといふ決意があるならば、今日からこれに應じた消費の徹底的統制工作も、もつと眞劍に、積極的に考へられてゐなければならない筈だと思ふ。

なるほど、消費節約を徹底的にやれば、平和産業はつぶれるものも出來てこやうが、これは戰時經濟の眞劍な遂行のためには、止むを得ない犧牲であつて、此犧牲に對しては國家としても、できるだけ事業の救援なり、補償なりをしてやる工夫が必要なのである。

十六、物價統制

（公定と切符配給の途へ）

物價統制も、少くも、今日迄のところでは政府は一、二の特殊商品以外は殆んど統制らしいものはやつてゐないが、最近輸入統制の進むにつれてさう呑氣な事ばかりもいつてゐられない事態となつてきたらしい。輸入統制は必然に日本の物價を國際水準より割高としてしまひ、延いて輸出促進を妨害しつゝある實情となつてきてゐるので、漸く眞劍な一般的物價統制が考へられてきてゐるやうだ。

『一體、戰時物價統制策として政府は先に暴利取締令を改正、適用品目を擴張すると共に、輸入制限に伴ふ價格の騰貴に對しては、棉花、綿糸布、ゴム等について自治的統制によつて、公定價格ともいつてよい最高價格制をとつてゐる外、需要の急增に對しては、民需を抑へ、軍需品の供給圓滑を圖る見地から、鐵、銅その他について、省令を以て使用制限を實施。棉花、羊毛等輸入原料の制限を行ふため、國內においては、純毛及び純綿糸の生產及び消費の制限を行ふことになつた。

今回晒木綿の市價暴騰に對して、政府のとつた賣止め及び公定價格は、單に晒木綿のみ

に止らず一般物價高に拍車をかけることを惧れて、とつた應急措置である』（以上吉野商相談、二月二十一日讀賣による）

しかし、大局からいふと、今日迄のやり方は表面的の應急處置であつて、眞劍に配給の統制を合理化し、內面的に物價を取り締る努力が不充分であつた。これからは一方に價格公定乃至强制へ乘り出して行くと共に、他方に配給の統制を强化し、金さへ出せばいくらでも買へるといふ拔け途をおさへて眞の消費の制限に徹底するところ迄進む必要がある。政府も之に自覺するところがあつて、『今議會には輸出入臨時措置法改正案を提出、今後は重要產業別に法律に基いて權限をもつた物資調整協議會を設置せしめ、物資の配給統制に當らせると共に製造業者のみでなく卸賣問屋、小賣商等中間配給機關に至るまで一貫して配給統制を行ひ得るやう現行商業組合法を改正しアウトサイダーを强制加入させるため新たに統制商業組合を組織し得ることゝした』（吉野商相談）

かうして、物價統制の途も今や擴大强化の運命にあることが判る。

第二篇　國際情勢と新經濟政策の必然性

一、長期戰と戰時經濟

周知の通り、最近支那に對して、日本の斷乎なる態度を宣布するに至つたのであるが、これによつて、戰爭は所謂長期戰爭の形に入つて來た譯であり、從つて、戰時經濟の問題も此の情勢に伴れて、動いて來ることになる。

この戰爭が大體どんな風になるかといふことは、一つの大きい問題になる譯であるが、これは勿論容易に見透しすることは出來ない。唯かういふ情勢になると、容易なことでは妥協が出來ないといふことだけは、考へることが出來るのである。

そうなると、本年度の對支事變の動きは色々の重大なる發展を豫想されるのであるが、特に、廣東を如何するかといふことは、差當り非常に切迫した大きな問題ではないかと思ふ。

二、對支武器輸送の中心

とりわけ、廣東を如何するかといふのは、廣東から粵漢鐵道その他を通じて入つて行く武器が相當多い。同時に海南島とか、南支一帶に掛けて工作して居る色々の軍事的な施設に對して、事實上……、かういふことになると、この問題が國際的に非常に微妙な關係を孕んで來る譯である。

今日支那に對して、武器を外國から供給される道は、先づビルマの方から、或はフランス領印度支那の方からトラックに依つて運び込まれる道、其他には滿洲を通じてロシヤの方から入つて來る道、等が考へられるが、この中ロシヤから入つて來る道は、色々大きく傳へられては居るけれ共、事實上この邊は非常な荒廢地であつて、交通機關も殆んど無いのであるから、これを通じて輸送される武器の量は……、尤も飛行機を空輸して持つ

て來ることになれば、相當の臺數を輸送することは出來る譯であるが、それ以外の大砲とか、その他重要武器の輸送能力といふものは……何しろこゝを旅行するのに……。

かういふ風にして、若し廣東から、粵漢鐵道を通じて北上して來る道、或は……にトラック路を盛んに造つて居るといふことであるが、こちらの方から入つて來る道が、依然として無事に通行出來るといふことになると、これは……である。今、支那事變を解決するといふ立場からいふと、中部、南部支那の敵對能力を、その儘にして置いて、北支那丈け固めて行くことは、容易ならざる困難を齎らす心配があるから、一應廣東を抑へて置くといふことは、一つの緊急對策であるかとも考へられるのではあるが、併し乍ら、何分にも廣東を……ことゝ同じであるので、對英關係の微妙な動きを考へなければならない譯である。延いてはアメリカ、フランス邊りの形勢も難かしくなつて來る虞れがある。それで若し……、……從つてイギリス領との日本の經濟的な關係も非常に困

難を伴つて來るのではないかと考へられて來る。

この邊が非常に難かしい國策上の問題であつて、個人でも借金をして事業を擴張して行く場合に、何の邊で事業の擴張をやめたらいゝか、何處迄無理して借金をしていゝか、といふことの判斷が非常に難かしいのと同じやうに、日本といふ國家も……

……、……さうして中部支那及南部支那に親日的な政權を育て上げるといふやうなことが出來れば、これに越したことはないが、それは日本の經濟力と照應して愼重に考へねばならぬ問題である。

併し乍ら、一方、軍略的にも考へなければならないのであつて、今日の國際情勢の動きに照らし合せて見て、……といふことならば、それは今日が……。

即ち、既に支那に對して兵を動かして居る……この海南島をイギリスが軍略的……それから香港の……

……。

三、英國極東防衛陣の强化

これは最近有力なる……、イギリスの東部アジアに於ける軍略的な防衛陣地は、新嘉坡が最も大きな中心地であつて、これを固める爲に、數年來非常に大きな金を掛けて建築を急いで居たのであつたが、それが略完了致したので、こゝに大艦隊を集中する形になつて居る。そして、濠洲のポートダーウインと新嘉坡とを繫いだ線が、當然防禦地の第一線となる譯である。これは常識的に考へられることであるが、更に……、この三つの軍港を以て形作られた線を突破するといふことは、非常に困難であるとのことである。

もし、新嘉坡が孤立した軍港ならば、攻擊力をこゝに集中することが出來るのである

が、……、……といふ風に、連鎖のある要港に依つて固められた一線の陣地といふものは、これは攻撃する側に取つては非常にやり難い。のみならずこの邊にはオランダ領、イギリス領、フランス領の島が無數にあるので、この島々には……。かういふ風に……

……を近代の大艦隊が攻撃するといふことは、軍略的に非常に困難を感じることである。

最近、周知の通り地中海に於ては、イギリスの大艦隊が、イタリーの航空隊の爲に完全に抑へられた。これは要するに地中海のやうな、さういふ島の多い所で、飛行機の根據地が非常に多く、潜水艦の裝備を以て脅やかされる所では、大艦隊を動かすのは、非常な不利があるといふことを事實に依つて立證したものであるといふ風に見られて居る。……、……、……、オランダは全力を擧げて、イギリスと提携するものと見なければならない。それからフランス領は勿論、イギリスと提携して行くといふ譯である。

四、新嘉坡の前衞・香港

一體、イギリスの植民地といふものは世界に擴つて居るが、カナダの大きな植民地を除いて了へば、後は大部分が印度洋の圍りに集中して居る。印度洋は、つまりイギリスの植民地の湖みたいになつて居る譯であつて、濠洲があるし、それに新嘉坡を中心にした海峽植民地、ボルネオ、ニューギニヤ、その他のオランダ領とイギリス領、これがまあイギリスの植民地のやうなもので、それからビルマに入つて印度に來て居る。さうして、アラビヤ、イラン、イラク、總てイギリスの植民地であり、準植民地である。それから埃及、イギリス領スダンがある。

しかし、最近イタリヤがエチオピアを取つた爲に、イギリスはこの印度洋の片面に非常

な不安を生じて來てゐる。それからイギリスのケニヤ、南アフリカ聯邦、かういふ風に、總てイギリスの領地は印度洋を取卷いて構成されて居るのであつて、埃及およびこの邊一帶をイギリスは固めて、敵の勢力の入つて來ることを抑へ、更に、世界戰爭の直前に於てはドイツが東方政策と稱して、こつちに出て來ることを喰ひ止めるのに努力したのは有名な事實である。

今日に於ては……を脅かす最も强力なる敵國であつて、こつちから出て來ることに對して、主力を擧げてこれを防禦する形になつて居るが、併し乍らこれ丈けでは何うも不安があるので、イギリスは更に北上して香港を第一の前衞としてゐる。かくて、香港と新嘉坡の防禦陣地を造りつゝある譯である。さらに、カムラン灣といふのが、フランス領印度支那にあるが、これはロシヤのバルチック艦隊がこつちへ廻つて來た時に、最後にこゝに投錨した有名な港である。これはフランス領の良港である。この香港とカムラン灣と新嘉坡を繫ぐ線に依つて、新しい陣地を組織して居る譯である。それから

香港を中心にし……粵漢鐵道に金を貸し、南支の背後地を完全にイギリスの勢力範圍に置いて、……この線を固めて居る譯である。こうなると、……、……、……。

だから、日本とイギリスとの……、早晩何うしても日本は南洋方面に經濟的に伸びて行かなければならん。さうすれば何うしてもイギリスの勢力と對立する事になる。イギリスは全力を盡してその守りを固めて、日本の勢力の南下を抑へやうとすることが、歷史的に見て避くべからざる大勢である。といふことになると……、……、……、……、……、……。

のみならず、最近イギリスはヨーロッパに於て軍事上の不利を痛感して、五ヶ年計畫で

十五億ポンドの大軍擴工作を始めて居る。それで來年度邊りは一年に新しく六、七十億圓に上る處の巨額な軍事費を計上して居る。さういふやうな大軍備工作は、單にヨーロッパのみならず、東洋に於ける英國の地位を充分考へて居る結果である。これが完成すれば新嘉坡に回航して來る海軍及び飛行機の勢力といふものは非常に强まるものと見なければならない。

五、地中海制海權の推移

であるから、……この廣東を……、……、……、……何故ならばイギリスは五ヶ年計畫を昨年からやり出した許りであるから、……の

みならず、地中海の問題が、直ぐこつちの問題に反映して來るのであつて、地中海に於て、このイタリヤの潜水艦と航空機に壓迫されて、イギリスが地中海の制覇權を失つて了つたのみならず、エチオピヤをイタリヤが取つた爲に、そつちからも側面を突かれて、埃及は今迄リビヤとエチオピヤとから挾まれて、イギリスの純屬領であつたのであるが、今日では從來のやうにイギリスに屬國的な態度を示さんやうになつて來た。……、イギリスの軍艦は已むを得ず、……移らなければならんといふやうな事實が最近起つたりして、そのことは即ち紅海、スエズ運河であるが、これは今迄はアラビヤ、埃及、イギリス領スダンに依つて固められて居たイギリスの制覇權の下に立つてゐたのであるが今日では、イタリヤに抑へられて了つて居るといふことを意味するのである。イギリスが地中海の制覇權を失ひ、このスエズ運河から紅海の制覇權を失つたといふことは、その東方政策に於ては非常な損失となる譯で、つまりこれを通過し

て大艦隊をこつちに廻航して行くといふことは今日の狀態では出來ないのである。

日本とイタリヤとドイツとが所謂東京、羅馬、伯林の樞軸を作り上げて固く提携して居る以上は、この地中海を通つて大艦隊を廻航することは非常に困難であると見なければならないのみならず、スペイン政權が大體に於てこのフアツシヨ側の勝利に歸して、――そのために、このスペインの對岸に在る小さな島がフアツシヨ勢力の下に歸したのである。イギリスの地中海の咽喉と言はれて居た要港であるジブラルタルも亦對岸からこれを突くことは容易なことになつたやうである。

六、地中海を廻る歐洲の情勢

それから、イタリヤの勢力の爲にフランスとアルゼリヤとの聯繫といふものが遮斷されて居るのである。アルゼリヤといふのはフランス陸軍の約三分の一を提供して居ると言は

れる土民軍の根據地であつて、このフランスの軍隊といふものは、アルゼリヤの土民軍を徵發せずしては成り立たないといふ程、軍略的には重要な地點である。それのみならず、食料其他の供給に就て非常に問題になつて居るのであるが、今スペインがイタリヤと提携することに依つて、フランスはこの方からも突かれる。ドイツからも突かれる。イタリヤからも突かれる。アルゼリヤは直ぐ隣りのイタリヤ領リビヤから突かれる。今リビヤに向つてイタリヤは非常に多くの軍隊を輸送して、こつちからフランスを突く態勢を示して居るやうである。その爲にアルゼリヤが動搖を來して居るといふやうな、ニュースがあるさうである。結局フランスの軍略的な位置といふものは、獨伊西三國の提携に依つて非常に弱められて居るといふことは事實のやうである。

さういふ譯であるから、イタリヤの潛水艇や飛行機は地中海を我物顏にして、ジブラルタルを突破してこの外洋に出て來ることは自由であるが、イギリスはこのコースを利用して印度洋から極東に出て來ることが出來ないばかりでなく、已むを得ずアフリカを廻つ

て、外周コースを通らなければならぬのであるが、これは非常に大廻りで、非常な損であり、このコースを取る場合にも地中海から出口を塞ぐことは出來ないから、イタリヤの潛水艇、及び飛行機によつて、絶えず中途で脅される危險性がある譯である。

それからこの邊にスペインの領地があるから、この邊の要港を利用して、途中で飛行機、或は潛水艇でイギリスの艦隊を脅かすといふ事は、戰略的に不可能な事ではないと思はれる。さうすれば、既にこつちを廻つてやつて來るといふ事が非常に困難であるのみならず、その中途で、イタリヤ、ドイツあたりから背後を突かれるといふ危險もあるのであるから、これを廻つて極東に大艦隊を廻航さして來るといふことは、軍略的に非常に困難が強まつて來て居ると見なければならない譯である。

のみならず、ヨーロツパそのものゝ今日の情勢が非常に切迫して居り、ドイツはこの英佛海峽を突破することが出來ず、それから北海を突破する事が出來ない爲に、已むを得ず、東部進出政策を採つて、チエツコスロバキヤ、オーストラリヤから、こつちに出て背後か

ら、ウクライナを突くといふ陣形を採つて居るやうである。さうなれば、ドイツは結局イタリヤと聯繫することに依つて地中海、こつちから食糧其他の補給を得ることになる譯である。これが完全に繫がるといふ事になつて、ドイツの東方政策が進めば、この聯繫は可なり强固なものになると見なければならぬ譯である。こういふ風にヨーロツパ自體の情勢が非常に切迫して居る時には、却々大艦隊を極東方面に廻して來るといふことは、困難が大きいと見なければならないのである。のみならず、今日のイギリスの海軍力を以てしては、その一半を割いて極東方面に向つて來るとしても、その勢ひは……

……だから、今日……イギリスが、

……來るといふやうなことは恐らく……。

七、日英の經濟的對立

以上述べたやうな、國際的な關係を考慮すると、……

……併しながらこれはイギリスが……經濟的に日本を苦しめるといふことは、これは先づやると見なければならない。この領域をイギリスが抑へ、更に南洋をイギリスが抑へて、日本の商品をボイコットするといふ事になると、恐らく日本の全輸出の三分の一位は、尠くともこれに依つて抑へられて了ふと見なければならないのである。さういふやうなことになると、日本の經濟的な耐久力には非常な破綻を來して來る譯である。

それ故、廣東を抑へるべきか否かといふことに就いては、或はイギリスと適當な條件に於て妥協すべし、餘り勢に乘じて借金許り殖して、擴張に沒頭するといふことは、却つて行過ぎて將來に禍根を貽すといふことになる、却つて北支那位を固めて置いて、中部支那、南部支那は、吾々の子か孫かに處置を委せたらばよくないかといふやうなまア漸進的な議

論も出て來る譯であるが、この問題が何ういふ風に動いて行くかといふことは、單に本年度の戰時經濟の發展のみならず、今後の全國策の大局的な動きにも大きな影響を齎らすものであらうと思ふのである。

尙假に……として、イギリスがアメリカと提携して日本を攻めるといふやうなことが有りはせんかといふやうな問題も起つて來るのであるが、これは恐らくあり得ないであらうとみられてゐる。何故ならば、アメリカがイギリスと提携して日本を攻めるといふ事になれば、成程イギリスは大艦隊をこつちへ廻して來ることが出來なくても、アメリカは全能力を擧げて攻めて來ることが出來る譯であるから、事實上敵の海軍力の主力はアメリカ側に有る事は云ふ迄もないのであつて、即ち英國よりも米國の方が遙に大きな勢力を持つて日本を壓迫して來る譯である。さうすれば日本の防禦的な陣地もこの主力艦隊に向つて第一線を向けるといふことになるから、主力と主力との爭ひは、イギリスと日本ではなくして、日本とアメリカといふことになる。

併し乍ら、さういふ風にして擁護される利益はイギリスの利益であり、危險に曝されるのはアメリカの主力艦隊であるから、この太平洋を渡つて十數日の日子を要して遙々大艦隊を廻航して來るといふことは、日本のやうな精鋭な飛行機と潜水艦の武器を持つて居る海軍に對しては、非常に危險であることは言ふ迄もないのであつて、それ程大きな危險を冒してアメリカが今日果して出て來るかどうか。利害の打算から云ふと非常な疑問になるといふ風に一應見られるのであるから……非常な軍略上の問題と經濟上の考慮との交錯する難かしい問題となる。或意味に於ては日本の國運の分岐點であると考へられる程、重大な問題を孕んで居ると思ふ。假りに……、長期戰爭の形になるのであるから、今後日本の戰時經濟といふものは、勿論益々强化されて行くことは、これは已むを得ない必然の大勢と思ふ。何故ならば、假りに今日……にしても、この方面から武器が入つて來るのであらうし、支那側の抵抗力もそれだけさゝへられる譯である。既に國際聯盟は盛んに對支武器賣込みの工作をやつてゐるのであり、從つ

て對支戰爭もまだ〳〵色々な事件が起きて來る譯である。のみならず、われ〳〵としてはこれから將來に於て起り得る處のもつと大きな衝突に備へて眞劍な準備をしなければならぬ。之は列强の最近の軍擴工作から考へても當然な事態である。どうも此點日本の官民識者いづれも、むしろ呑氣過ぎはせぬかと、それのみ心配となるのである。

八、國防經濟充實の急務

斯ういふ風に考へて來ると、今後のわが經濟狀勢の動きは、實に劃期的な國際政局の動きいかんに依存することになるのであるが、いづれにせよ、次の一點だけは、斷定して大過ないと思ふ。

即ち、今日施行されて居るやうな戰時經濟統制の工作は、好むと否とに拘らず、將來、益々强化されて行くものと考へざるを得ないといふことである。謂はゞ、今日の支那事變

は誰れも言つて居るやうに、新興日本の國際的大試錬の序幕に過ぎないと見るのが妥當なのであるから、それに對應する非常時的施設も、亦强化されるのみといはねばならぬ。

一體、日本は從來何回かの大戰爭を經驗してきたが、絶えず背景には英吉利なり、亞米利加なりといふ大きな國家の非常な好意を受けてゐたのである。それ故、財政的に、或は金融的に、或は武器の供給に、絶えず助力を受けながら、戰爭をして來た經驗ばかりを持つて居るのである。

又、露西亞との戰爭にしろ、支那との戰爭にしろ、從來の戰爭は相手に勝てば、それで一應暗雲は一掃され、後は明朗になり、勝利氣分に浸ることが出來たわけである。從つて、戰時經濟施設も戰爭の一段落と共に解消して、あとは、すぐに平和的な好景氣に惠まれるといふことになつたのである。

併しながら、今回の事變は全く性質がちがつてゐて、いはゞ世界の列强から反對の對象となつて、孤立封鎖の下に奮鬪してゐるのであつて、又、この對支戰爭はほんの序幕に過

ぎず、戰爭が一應日本の勝利に歸する事は、不安なしとしても、其後に待機する所の、非常に險惡な國際的環境の事を考へれば、戰勝氣分などに浸るといふやうなことは到底出來ないのである。

若し、萬一にも、浮はついた戰勝景氣に醉つてしまうといふやうなことになれば、國家の前途は甚だ危險であるし、從つて又、そこには社會的にある程度の、フリクションが起つて來る可能性がある。

戰地に於て働いてゐる人々の、凱旋と共に提出するであらうところの色々な革新的な要求と、右に述べたやうな戰勝氣分とは、恐らく容易に折り合へないものがあるにちがひないと想像されるのである。

九、ブロック的建設計畫の新段階

周知の通り、今日では世界列國が競爭して、國防產業の計畫的擴充に沒頭してゐる。それだけでも、後進國日本の努力は、列國より遙に大きくなければならぬ譯なのであつて、日本は今回の戰爭の始る前に、既に日滿を通じての五ケ年建設計畫を、日程に上せてゐたのである。

それは全體に於て、五ケ年二百億圓の建設資金を投ずるといふやうな非常に大仕掛な、工作であつたゝめに、此の工作を遂行するには日本の技術的、人的及び金融的な各般の全能力を緊密に組織化し、無駄の少しもないやうに、此の國策の目的の爲に動員する必要が痛切に考へられてゐたのである。とりわけ、全能力を重工業方面の建設に集中する工夫が強く要求されてゐた。

即ち、戰爭の有る無しに拘らず、國家統制に依る所謂準戰時的動員は、强化の一途を辿ることになつてゐたのであるが、其處へ今度の戰爭が始まつて、それが別の意味で統制への刺戟を著るしく强めたのである。

しかし、生產力擴充は此戰爭のために、豫定を大分狂るはせてしまつたから、今後は、その手違ひを取り戻さねばならないのみか、北支那まで取入れて、更にスケールを一段大きくしたものとして、再編成されなければならない約束の下に置かれてゐるのである。

現內閣も目下企劃院に命じて、今後のブロック的建設プランを、盛んに作成中だといふことであるから、此の大きな建設計畫を遂行するといふだけでも、戰爭中に劣らないやうな國策的な經濟動員が必要になるのであるが、それと併んで、戰後の社會施設の徹底的な解決もやらねばならないために、財政、金融の膨脹は必然であり、それが益々國家統制を强要するのである。

さういふ見地からみると、今日迄實行されてゐるやうな、經濟統制の如きは、極めて初歩的なものであり幼稚なものであつて、これ位な統制に驚き、之を頭から否認してかゝるやうな時代錯誤の考へでは、戰後の大規模な飛躍的經濟發展が出來る譯はない。

十、國運存亡の岐路に立つ覺悟

われ〳〵のみるところでは、日本は今日に於て一方に非常な發展的轉機に臨んでゐると同時に、或る意味に於ては、非常に危險な地位に置かれてゐるやうにも考へられる。餘程締つて行かなければならない。ます〳〵有ゆる經濟力を動員して、積極的に國力充實の工作を進めなければならないと思ふ。

なるほど、五ケ年計畫と云ひ、國防産業の充實と云ひ、かなりの努力を官民共に拂つてゐるのであるが、併し、諸列强もそれ以上に熱心に、日夜汲々として國力の充實に沒頭してゐるのである。

現に英吉利にしろ、獨逸にしろ、日本の何倍かの尨大な國防豫算を以て、一見甚だ無理のあるやり方も忍んで、國力の充實に當つてゐるのであるから、日本がこれ位の發展をも

つて、事足れりとして呑氣に構へて、戰勝氣分などに醉つて居たら大變だ。世界戰爭を經驗せず、隣接した强大國を有つてゐない、日本の國民が兎角呑氣になり勝ちであるといふことは、自然の傾向とも思へるが、これは出來るだけ警戒してかゝらねばならない。

國防産業を急速に擴大するには、どうしても、反面に國民的努力が要求される。從つて重工業そのものにも種々の國家統制が要求される譯である。

獨逸のやうな國防産業力の充實した國でさへも、有ゆる方面に國策的動員を行つて、少しも無駄のないやうに締つてやつてゐるのであつて、日本の如きは、其の何倍かの異常な努力を拂ふ必要があるのは、餘りに明白な事柄であらう。

ところが、さういふ異常な覺悟が日本の産業人にも、政府の要路者にも、又、國民大衆の間にも果して出來てゐるかどうか？——殊に、民間財界人の間に、やゝもすれば、未だに經濟統制を頭から回避しやうとしてゐるものもないではないが、これは時代の動向を見極めない證左ではないかと遺憾に堪へない。

これも最近獨逸に行つた實業家からの話であるが、その人がシヤハトに會つた時、

『あなたの國も色々な方面に困難があるやうであるが、それを乘切らうとして各方面に非常に徹底的な統制をやつてゐる。しかし斯ういふ事をやると、實業界は非常に窮屈になつて如何にもやり惡くなると思ふが、一體これで今後うまくやつて行ける自信があるかどうか』

といふことを聞いたそうであるが、其時にシヤハトが非常に陰鬱な顏をして、

『自分も出來るだけ斯ういふやうな統制は緩和したいと思つて色々考へても見、又努力しても見たが、奈何せん獨逸の國際的環境と、國內の復興的要求とが、斯の如き異常な統制の途を採らざるを得ないやうにしてしまつたのである』

といふことをしみ〴〵と告白したといふ。

之は時節柄わが國の產業指導者達も大いに玩味すべき一言と思ふ。

十一、今後の經濟政策上の二大眼目

此見地から、今後に於て、何よりも問題となるのは、一つは社會政策的諸施設の充實であり、他の一つは生產力擴充工作の再檢討であらう。

筆者は戰後に豫想される社會的フリクションを最少限度に制約し、持續的に國民經濟力の發展をもたらすためには、此の二大問題の併行的な解決が、劃期的な決意をもつて積極的に企圖されねばならないものと信じる。

大局的にみれば、此の二つの要求は、結局相互依存的のものであることに異存はあり得ないと思ふが、當面の具體的工作の見地に立てば、兩者の間に自ら輕重先後の差別がなければならない。

そこで、延いて、此のいづれを第一義的とみるかと問はれゝば、筆者は、躊躇なく生產

力擴充工作であると主張するものである。といふことは、いはゆる均衡化工作即ち富有階級の過剰收入をもぎ取つてきて、貧窮階級にバラ撒くことの必要を認めないのではない。それどころか、わが經濟界の現段階に於ては、相當徹底的な富有者課稅の急務を痛感するものではあるが、かゝる均衡化工作を第一義的のものと考へて、そのために當面の生產力擴充工作が、停頓するのも介意せぬといふ風なやり方には贊成出來ないといふのである。

ところが、周知の如く、今日のわが經濟機構に於ては、生產力擴充は、主として民間事業の發展に依存してゐる。民間事業の發展はまた適度の營利的條件の存在を前提としてゐる。だから、獨占利潤や過大の戰時利潤の沒收は、當然のことであるとしても、適正の營利條件をも破壞するやうな小兒病的政策は到底採用出來ない。

但し、右の營利機構的拘束の下に於ても、尙ほ次のやうな國策的提案は矛盾なく主張出來る。

それは勤勞大衆が、非常時重壓の下に臥薪嘗膽してゐる際に、資本家だけが、私腹をこ

やして奢侈にふけることは斷じて許されない。だから、

（イ）適正な企業利潤は認める代りに、その生產力擴充目的への再投資を極力要求する。もし、自發的に此種の再投資が行はれない場合は、强制的に配當を制限し、公債への應募をなさしめる。

（ロ）企業家が從業員のために、なるべく手厚き生活擁護法を講ずることを要求する。コスト切り下げの標語の下に勞働力の過重搾取を計り、配當や幹部ボーナスの增大のみに沒頭する營利萬能主義を排擊する。企業の指導精神を革新して、國策的生產協働體としての家族主義的イデオロギーの實踐を要求する。かゝる傾向を助成すべき社會立法を要求する。

（ハ）獨占的釣上げや投機的買占め等によつて、不當に價格を暴騰させるものに對して、峻嚴なる國家統制策を施し、特に生活必需品の値上りを抑制する効果的工作を要求する。これには、いはゆる自治統制機構を利用すべきであらうが、必要に

應じては徹底的な價格公定を斷行せねばならない。

要するに、筆者の年來の持論たる『企業精神の公益優先化』を効果的に實踐せしめるといふことは生産力擴充への障害ではなくして、その順調な進展のための前提要件とみられるのである。

筆者は、産業企業のマネーヂメントを官僚獨善に一任するの弊を痛感してゐる。小兒病的な國家社會主義の缺陷も熟知してゐる。企業の管理は飽く迄エキスパートたる企業家に獨裁的に一任するのが上乘の策だと思ふ。

しかし、國策から乖離した營利一點張りの時代おくれの企業家には、も早今後の大企業は任されないといふ感じが切實となつてきてゐる。産業人は今にして、戰後社會經濟的××の必然性に充分な認識を透徹せしめ、國運の積極的發展に寄與すべき國策的活躍の途につく覺悟が緊要である。それを怠つて消極的安定を計らうとするとき、又、協働從業員の生活安定の責務を忘れて、私腹のみを肥さうとするとき、××的な社會不安の勃發は必

然となるであらう。

十二、生産力擴充と反動來の不安

かくて、現在及び近き將來の經濟政策上の最大の問題は重・化學工業的生産力大擴充工作である。支那事變の結末いかんに拘らず、われ〳〵は尙ほ全力をあげて、此の擴充工作に沒頭せねばならないものと信ずる。

もつとも此の結論に就ては、自由主義的、舊資本主義精神の人達からは『餘り無茶なことをいふな』——といふ反對論が起るであらうし、現にいはゆる財界巨頭の考へ方の中にも、そういふ反對論に共鳴するものが、少くないやうにも思はれる。

此の反對論は、なによりも、『マーケットの反動的縮小に伴ふ過剩生産の必然性』を力説する。『そんなに能力の擴充ばかり無鐵砲にプッシュしてもマーケットがなくなれば、

破産する外ないぢやないか？』――そして、『世界經濟は今や漸く、重大な反動的萎縮時代へと逆轉し始めてゐるのだ』――それだのに『今後益々生産力を擴充せよなどと主張するのは無責任極まる暴論だ』といふのである。

なるほど舊來の景氣論からいへば、――そして、又、舊來の自由放任的・營利經濟の立場からいへば、――かうした反對論には多少の眞理があつた。だからといつて、われ〳〵は今日以後に於ても、この反對論に聽從せねばならぬなどといふ理由は勿論ない。

筆者からみれば、かうした反對論は、もう明白に時代おくれであると思ふ。そして、その立論の根底をなしてゐる世界景氣觀も、徒に舊時代の景氣循還論の公式的再生産に外ならないと思ふ。

なぜかうした、擴充工作反對論（乃至自重論）が時代おくれかといふと、それが、此の擴充工作の國策的目標を切實に理解してゐないからである。

なるほど單純な私的營利の立場だけから目先き的の觀測をすれば、これ以上の生産力擴

充は危險が伴はないとはいへない。だからといつて、此の擴充工作が國策的に中止させ得るとでも思ふのは、時代おくれの證據だと筆者は考へるのである。

改めて冗説する迄もないことだが、現下の擴充工作が、止むに止まれぬ國家的生存乃至發展の不可避の準備工作であること位は産業人である限り、誰れしも一應承知し拔いてゐやう。それにも拘らず、彼等が、もう、これ位で一段落とせねばならぬ等と主張するには、おそらく次の如き理由があるのではないか？

（イ）こんな工作をつゞけてゐては、いつ際限がくるか判らない。それでは國民の負擔力がつきてしまうし、又、日本が積極的に出れば出る程、外國も積極的に出るから、此邊で、國力相應の打ち切りをやるべきだ。

（ロ）萬一、このまゝつゞけて、大反動でも、來やうものなら、その大混亂は到底拾收出來るものではなく、その結果、いはゆる新興コンツエルンの倒壞が相次ぐやうな慘狀が生じやう。さうすれば反つて、日本の國力は削減されるではないか。

筆者は此の二つの主張には、いづれも幾分宛の根據はあると思ふが、現下日本の政治的、經濟的動向の認識からみて、いかにも時代錯誤的な考へ方だと斷定せざるを得ないものだ。

先づ（イ）の點に就ては、こゝで餘り深く立ち入ることを好まぬが、要するに、日本の國家的發展の要求が、現在程度の國防準備で、不安なく充足できると思つてゐる點に根本的な錯覺がある。

『日本は此處で一息ついてから、再スタートしたらよからう』といふかも知れぬが、日本が休んでゐる間にソ聯なり、他の外國なりがドン〳〵進んでゐるのでは、益々彼我の開きは大きくなるばかりだ。

それに、日本の國力はこの位の負擔の加重で、へこたれるものと考へるのも、認識不足の甚しいものではなからうか。さう悲觀的に考へるのは、資本的な採算のみに捕はれて、國民全體の異常な勃興的決意を計算に入れてゐないからだし、又、現下の國際狀勢の險し

さを認識しないからであらう。

なるほど、資本家的財政、經濟の傳統的立場からみると、現在以上の財政膨脹、公債增發、延いて增稅等々……は、採算的營業の餘地を乏しくするし、必然に自由主義機構の安定をおびやかし、國家統制を强化せしめるのみだから、なるたけそんな無理はやらぬがいゝと考へるかも知れぬ。

だが、それは、畢竟國民大衆の社會的立場ではなくして、資本家的な個人的採算の立場から一歩も出でない考へ方だ。

國民的意思は、日本國家が、ソ聯や英、米の妨害を突破して、東亞ブロックの盟主として、立ちおくれたアジア民族の更生のために、決死の血鬪を敢行しつゞけることを肯定してゐる。そのための準備には全國力の動員を完成して、萬全を期すべしと考へてゐる。

財政的壓迫も國家統制の强化も生活水準の一時的低下も、すべて甘受しやうと覺悟してゐる。この位の困難で日本國民がへこたれるなどとは毛頭考へてはゐない。（現にソ聯や獨

伊等では大衆は遙に大きい負擔を甘受して將來の建設の土臺を築きつゝあるのだ！）

もつとも、負擔は大衆だけでなく、資本家も、貴族も、公平に課せられねばならぬといふ主張は著しく强まつてきてゐるから、此點、特權階級にとつては甚だ物騷千萬なことかも知れないが、それは盲目的な××とはちがつて生産力のぶちこはし等は毛頭考へてゐないのだから、進歩的な企業家なら、充分此間に積極的に善處する途はあるべき筈のものだ。

ともかく、かういふ國民的意思の興隆を認識出來ないで、此邊で、一休みしそれによつて、傳統的な營利機構の安定を計らうなどといふやうな考へ方をする産業人は、もう、なんといつても時代おくれの人達であるといはれねばなるまい。

次に（ロ）の點、即ち、そんなに生産力ばかり擴充させて、大反動が來たら、反つて拾收出來ない混亂をまねく因ではないかといふ考へ方も筆者からみれば、時代おくれの見識だといはざるを得ない。

第一、大反動がいつ、どこからくるといふのか？　近頃アメリカの景氣が惡いから、それが世界的大反動をひき起すとでもいふのか？

なるほど、アメリカは、こゝ數ケ月來甚だ反動的ではあるが、それが直ちに『大恐慌』へ轉落するかどうかは疑はしい。なぜといふに、アメリカの惡化は少からず、ルーズベルトの政策的掛け引き（即ちこれ以上の好景氣を人爲的に抑へて、景氣を持續させやうとするデフレ的操作）の影響をうけてゐるのであるから、もし景氣が、これ以上惡化するやうならば、おそらく、今度は挺入れ的救濟工作に出でるであらう。それが、少くも當分は、まだ相當効果を發揮するであらうと思はれるからだ。

筆者は勿論『萬年景氣』などを信じるものではないが、さうあはてゝ、公式的な景氣循還說をかつぎ廻ることには贊同ができないものである。

かりに、アメリカに多少の恐慌的狀況が生じたからといつて、世界恐慌が、必然だとみるのは疑問の餘地がある。といふのは、歐洲諸列强は軍擴を中心として、既に、孤立的國

内的景氣の强烈な國家的操作に沒頭してゐるからだ。

アメリカが惡化すれば、英國を中心として、いづれも、國内操作がやり難くなるにはちがひないが、それにへこたれて、國内産業の恐慌的混亂を惹起させるやうな無能、無爲な政府は、おそらく今日の歐洲列强には見當るまい。けだし、折角國民の血と汗とを、しぼつて築き上げてきた國防産業の崩壞を袖手して傍觀するやうな、間抜けな爲政家は、よもや、どこにも存在すまいからだ。

彼等は必ずや、國家統制を全面的に强化して産業力の維持發展のために全力を傾注するにちがひなく、資本家も勞働者も、それこそ戰時的國策動員の意氣込みで、遮二無二になつて、働き拔くであらうと思はれる。

それと同時に、國際政局の風雲は必然に、此の經濟的重壓のショックを受けて、益々險惡化する。それが又、必然に、國家的統制による國防充實へと彼等を驅り立てざるを得ない。だから、もし、アメリカ邊りが恐慌化するとせば、歐洲の戰雲は、その時こそは異常

な物凄さを露呈する時であり、その緊張裡に戰時的統制力で、歐洲列强の經濟的反動は、しばらく喰ひ止められるにちがひない。その擧句に可能なことは大××の勃發であらう。

十三、日本經濟政策の運命的な進路

もし、以上の推測が大過ないとすれば、アメリカの景氣惡化を恐れて、日本の經濟力擴充を躊躇するといふ考へ方が、いかに國家的には危險であり、時代錯誤的のものであるかは冗說を要すまい。日本にとつても歐洲の風雲は決して、も早、對岸の火事ではすまないからだ。

かうみてくれば、ソ聯といはず、歐洲列强といはず、今日米國景氣の惡化をおそれて、國防工作を手控へやうなどと考へてゐるものがどこにあらうか？

彼等が、既に、さうだとすれば、いやおうなしに、日本の國防工作も、益々馬力をかけ

てスピード・アップされなければならぬ運命の下にあるのではないか？

今日のやうな大戰爭か、大××かといふ、せつぱつまつた歷史的段階に於て、相變らず區々たる景氣循環說などをかつぎ廻るやうな心掛けの產業人は、もう時代おくれと斷定されても仕方あるまい。

といふことは、かりに、アメリカ邊りが景氣惡化して來やうとも、日本としては、飽く迄、國策的計畫に基いて生產力擴充をつづける。その財源は、國家財政の膨脹で賄ふ。大部分は公債增發であらうが、增稅も斷行されやう。信用インフレも行はれやう。戰時統制を益々全面的に强化して、惡性インフレ化を防止しながら、苦難をおかして、將來の發展にそなへる努力をつづけるだらう。

國防充實は日本のみでなく、滿洲國、北支、南洋等の未開資源の開發を切實に要求する。それによつて、日本產業の將來の國際的鬪爭力も、亦畫期的な强化をみられるやうに周到なエキスパート的工作を要求する。

だから、今後の經濟界は形式上は相變らず資本主義的、民營企業的のものとしてつゞいて行くであらうが、その肝心の推進力は、も早、私的營利の打算だけではなくなつてくる。いはゞ、民營事業の性質が、營利的、私的觀點からだけでなく多分に國策的、國家的觀點から、運用され、指導されるやうになる。

產業家——殊に大財閥的大產業家は、此際、根本的な自己反省を强要されてゐることを自覺せねばなるまい。

民間の經濟團體、カルテル、トラスト等の强化、擴充は固より必然のことではあるが、筆者の持論のやうに、それらの運營が、國家意思と緊密に結合して、半公的機關のやうに轉化して行く。

最も强力な國策的統制をうけるのは、何よりも金融業であらう。そこでは資金運用の自由は、次第に弱められ、國策機關の命令乃至勸告によつて支配される傾向が益々强まらう。いはば金融業の民有國營化こそ、必然的の運命と思はれる。

もし、時代おくれの財界人が、かうした成り行きを一日でもおくらせたいといふ淺はかな考へから、生産力擴充工作を否定しやうと妨害するならば、結局は、おそらく、擴充工作の否定とはならずして、財界自治そのものの否定を、ドラスチツクな方法で招來することにならう。それほど、國家的な擴充意思は、決定的なものに迄成長してゐるとみてよからう。

勿論、そんなドラスチツクな方法をとらねばならぬやうな事態は、決して、發展日本の現段階に於て、望ましいものではない。極力、それは回避されねばならぬが、それには經濟人が、根本的な自己反省を經て、積極的な擴充工作に自發的に欣然と應召する覺悟が緊要である。

十四、日本重工業の前途

最近、數年來、わが經濟界は、重工業の畫期的發展を中心として躍進をつゞけて來たのであるが、世界經濟の反動を悲觀的に考へる論者は、この重工業化工作も早晩挫折するであらうと、豫言するやうである。それは、ひつきやう、わが國の重工業の生産條件が海外列强に比べて劣等であるといふ根本的錯覺から出發してゐるのである。

筆者の見る所によれば、日・滿・北支のブロツク的開發と南洋資源の低廉なる利用を土臺とする吾が重工業の生産條件は、資源的見地からみて世界稀にみる優越なものといはねばならぬ。その上、設備は最も現代的な新鋭なものであり、勞働力は優秀なる技能をそなえて居り乍ら極めて低廉であるし、工場の位地は、大抵海岸線に近接してゐて海外進出には絶好の立場にある。のみならず、支那及び南洋諸國等の廣大な未開市場を手近かに持合はせてゐるのであるから、今後數年の後に於ては、わが重工業の國際的進出は、恐らく相當めざましいものを期待できるであらう。

この事は、單に筆者の一家言に止まらず、歐米先進國の重工業專門家が近時切りに脅威

を感じて、公然と日本のダークホース的存在に注意を拂ふに至つてゐるのである。

勿論筆者といへども、わが重工業的海外進出が、容易なる仕事だと手放しに樂觀するものではない。亦、日本重工業の高級的部分が先進國に比べて、技術と組織の點に於て尙劣つてゐるものゝ少くないことも熟知してゐる。それ故、國際的進出の爲には、幾多の國家的助成工作が、緊要缺くべからざるものである事を力說しなければならないと思ふ。

殊に、市場開拓の當初數ケ年間にわたつては、當業者も組織的なダンピングにより、多大の損失を覺悟してかゝらねばなるまい。國家としては、重工業市場の開拓に何よりも大切なる長期信用の調達を援助する特殊の金融的工作が必要である。

かくの如き、幾多の困難は豫想されるのであるが、それにも拘らず、大勢的にみて、わが重工業が早晩少くも東南洋市場を支配する運命にあることは、確信を以て豫見出來る。

もちろん、それには日本內地のみならず、滿洲北支の處女資源を急速に開發しブロック的獨占的市場の規模を擴大し、組織を集中的に强化して財政金融的な鬪爭力を涵養する必

要がある。國防充實計畫は、幸な事には、少くも尙、今後數年間にわたつて持續するものと考へられるから、その間に將來の國際的鬪爭に積極的に善處する實力を植ゑ付けて了はねばならない。

のみならず、國防充實が一段落した後に於ても、滿洲北支の產業開發を國策的見地から繼續し、それによつてブロック的市場の大規模な確保を圖らなければならない。

さうしておけば、假りに世界的景氣反動が襲來しても、先進國の重工業者と激烈な市場鬪爭を試みるに足るだけの確固たる足場が築き上げられるに至るであらう。

今次の支那事變の直前に於て、支那の重工業品に對する需要は、打ちつゞく恐慌過程に於てさへも、かなり目ざましき增大をみせてゐた。もし今後、日本の重工業が大發展をとげ、相當の餘剩能力を擁して對支進出を敢行することになれば、此の一角から支那との經濟的提携の氣運は、大いに促進されることにならう。

筆者は、今次の不幸なる日支衝突をして、かゝる重大なる相互依存關係の確立のために

する不可缺の地ならし的役割りを持たしめるやうに誘導しなければならないものと信じる。

（附記――尙ほ此點第五編に詳しく論ずる。）

第三篇　これからの世界經濟はどうなるか

一、世界經濟と今後の日本

アメリカを中心とした世界經濟の動きと、日本の今後の經濟界の動きとの關連を述べてみたいと思ふ。

周知の通り、日本では目下戰後の經濟開發工作が、緊切な大問題となつてゐるのであるが、これを、いかに積極的に進めて行くかといふことは、世界經濟と緊密に關係があるので、今迄のやうに世界經濟が順調に進んで居ると、今後の經濟工作も割合に樂に行く譯である。

併し、世界經濟がアメリカの經濟の反動から全面的に惡くなつて來ると、日本の積極政策といふものも、非常に困難になつて來る。そこで、筆者は今後の日本の經濟界を考へる場合に、世界經濟との繫がりを非常に重要なものであると思ふのである。

では、世界經濟が一體これで惡くなるのかどうか、かりに惡くなるとしたならば、斯樣な世界的な反動恐慌の眞最中に於て、日本は如何なる經濟對策を進めねばならぬか。もし、さういふ場合に於ても、積極的な擴張工作をやるのだとすれば、それに對應する財政、金融及び貿易上の各般の用意は、どういふものでなければならないか？　といふことを考へて見ねばならぬ。

二、世界恐慌襲來說は修正を要す

世界經濟の悲觀的な豫測は、今日では、かなりの有力な共鳴者を持つやうになつて來た。

世界經濟が、早ければ昨年中に、遲くとも本年中に恐慌狀態に入いるであらうといふ議論は、ヴアルガが唱へてから、日本でも若干有力な共鳴者がある。

しかし、筆者は、そんなに早く一般的大恐慌が來るとは思つて居ない。一體、此の恐慌が來るといふ議論は、結局、生產力の擴張が非常に人爲的なものであつて、而も勤勞大衆の購買力との間に大きな開きを生じてしまつたから、これ以上好景氣は、も早持續することは困難であらう。殊に、國際貿易の打開の思ふやうに行かない今日、國內的な人爲景氣には非常に無理があるから、最早、崩れ出すべき時期に來てゐるといふことが、根本的な根據のやうである。

しかし、筆者はこの議論は、今迄の傳統的な營利經濟といふか——資本主義的、自由主義的な經濟の機構といふものを前提にして考へると、相當有力な議論だとは思ふが、今日の特殊な時局の發展下に於ては、餘程修正されなければならないものだとみるのである。

今日の世界の有力な先進國の經濟機構が、やはり依然として資本主義的なものであるといふことは、言ふまでもないが、併しながら、いろ〳〵の點に於て、營利經濟の要素は、著しく變色されて居る。

例へば、ドイツ、イタリーの如きは、尠くとも、最早營利經濟的な機構は、多分に政治的な他の要求――即ち國策によつて、強く動かされることになつてゐるのであつて、いはゞ特殊な國家統制的な機構に變つて來て居る。筆者はこの經濟機構の段階を『國策經濟の時代』といふ風に呼んで居るが、營利經濟が國策によつて動かされる時代といふのは、政治が國家的な大きな必要を背景にして經濟を動かす時代に變つて來て居ることなのである。

營利經濟の時代ならば、儲からない生産は止める。取引もやめるのである。併し、儲からないからといつて、今日では仕事を止めない。儲からなくとも國家が巨大な助成金を出してやらせるし、コストの非常に高い商品でも、政府が財政的な支出をして、それをつかはせるし、その生産を維持し、擴張して居るのが、今日の經濟の中心的な推進力になつて居るのである。

さういふ經濟の時代は、資本主義を全然廢棄するのではないが――從つて、ソヴェート・ロシアの經濟機構とは違つて居るのであるが、或る意味に於て、即ち國策によつて經濟が

動かされて居るといふ意味に於ては、一味の共通點もある。さういふ時代になると、外部から來る景氣循還の波の影響といふものは、餘程緩和されるものだといふことを考へなければならない。

現に、ソヴェート・ロシアに於ては、世界恐慌の眞最中に於て、擴張に次ぐ擴張を以て、今日に到つて居るのであつて、ソヴェート・ロシアには景氣の波動といふものはない。これは經濟が營利によつて動かずして、全く國策の必要によつてのみ動いて居るためである。

三、國策經濟の時代

（その典型としてのナチス・ドイツ）

ところが、ドイツとかイタリーの如き國になると、營利といふものは、勿論、全然否定はされないが、概していふと、國策によつて經濟が動かされて居るといふことは間違ひな

い。

最近のアメリカの『フオーレン・アフエアーズ』といふ有力な雜誌にドイツナチスの現狀を紹介した興味ある論文が出て居る。それによると、ドイツには資本主義機構は形ちだけ殘つて居るが、實際的には、その特徴が影をひそめてしまつて居るといふことを、いろ〳〵の事實を擧げて力說して居る。

例へば、勞働者の勝手な移動といふことは許されないのであつて、事業主が高い賃銀を拂つて、勞働者を引つこ抜くといふことは禁止されて居る。勞働賃銀といふものは、國家がこれを決定して、これによつて釘付けされて居る。從つて勞働市場といふものは——即ち勞働力の『マーケツト』といふ觀念は通用しないのである。『マーケツト』の觀念がないから、勞働力の資本主義的な經濟といふものはない。

勞働力が不足するからといつて、特に賃銀を引上げることも出來ないし、從つて、勝手に賃銀の高いところへ移つて行つて働くことも出來ない。

それから價格の經濟に於ても、商品のマーケツトといふ觀念が、多分にその存在理由を失つて居る。コストが高くなつて、需要が殖えたからといつて、無闇に値段を引き上げるといふことは許されない。儲らないからといつて、生產者が勝手に仕事を止めることも出來ない。もつとも國家が助成金をやつて損のないやうにはしてやるが……。だからマーケツトの觀念、即ち、プライスによつて需給が動くといふ今迄の自由市場の經濟の觀念は、多分にその影を薄くして居るといふことは事實である。

例へば、人造石油や、人造ゴムといふものは、國家の必要に應じて造られて居るが、これは非常にコストが高い。例へば人造ゴムの如きは、自然のゴムに比較して、三倍もの高いコストをして居る。にも拘らず、政府はこれを國策的見地から造らせる。そして、政府は巨額の助成金を與へることによつて、價格の上昇を抑へながら生產を促がして行く。

つまり、自由主義的な經濟に於て、物價の騰貴によつて、自働的に調節されるのをやめて、財政負擔に轉嫁させて、國家が、それを人爲的に處理して居る。それから、資金の統

制なども、勿論、嚴格に行はれてゐて、中央銀行、即ちライヒス・バンクが民間の銀行の統制上の實權を握つてゐて、勝手に資金を動かしてゐる。國策の必要に應じて、民間の資金を無駄のないやうに有効に動員して居るといふことが出來るのである。

産業統制も、勿論、全面的に行はれて居る。さういふ風に、各般の市場は單純な營利的打算によつて動いて居らない時代になつて來てゐる。

それであるから、外國の景氣惡化の影響が、國策的な生産及び經濟活動を左右する力といふものは非常に薄らいで來つゝあると考へることが出來るのである。個人的に放任すれば、みす〳〵損するからつくられないものでも、國家が人爲的に助成して、之をドシ〳〵つくらせるから、こゝには營利的な景氣の力は働かない譯である。

四、アメリカの景氣はどうなるか

そこで、アメリカであるが、アメリカは、いろ〳〵な點に於て、ドイツとかイタリーとかいふ——いはゆるファッショ統制の國々と比較すると、遙かに統制の程度が低いといふことは事實である。又、今日迄は軍擴景氣の影響を殆んど全くうけてゐない唯一の大國といつてもよろしい。だから、アメリカに於ては今迄のやうな營利的な景氣の波動は、ドイツ、イタリーに比較して見れば遙に大きく働く譯である。

併し、アメリカもニュー・デイル以來、いろ〳〵の點に於て、景氣を人爲的に統制して居る。最近のアメリカの景氣反動が、何から來たかと云ふことは、いろ〳〵議論もあると思ふが、そこには政府の人爲的な抑制政策が、非常に強く働いて居るといふことを、特に注目する必要があると思ふ。

ルーズヴェルトが、大分前から人爲的に金融の調節をやつて、ブームにまで景氣の發展することを抑えやうと努力したことは顯著な事實である。又、ニュー・デイルを復活することに努めてゐるから、これも間接に財界人氣を抑えてゐるにちがひない。

勿論、それだけではない。最近の景氣の惡化をもたらしたものには、農産物の豐作による價格下落の危險及び勞働爭議及び國際狀勢の惡化――斯ういふいろ〳〵な有力な事情もあるが、併しながら、とも角も、今日のやうな人氣惡化の一つのきつかけを作つたものとしては、過激なブームになることを抑えようとした人爲的な政策及反資本的な統制工作が、強く働いて居ることは爭ふべからざるところである。

だから、反面に景氣があまり惡くなるやうであれば、景氣を挺入れしやうとする逆の工作が今度は行はれるであらうとの期待を有つことが出來る。

米國の政府はさういふ挺入れをやる能力を、財政的にも金融的にも充分まだ持つて居ると確信するのである。だから景氣があまり惡くなれば、これを引戻す方策を必ず採るであらうし、又、あまりブームのやうに浮はついた景氣になりかゝると、これを抑える。さういふ統制によつて、出來るだけ景氣を持續させようといふのが、今日のアメリカの政府の態度である。それが、まだ〳〵相當有力に働き得る健全な段階なのではないかと思ふので

ある。

今日の國家統制力をあまり輕蔑して、そんなことをやつても、とても景氣を動かす力なんかないといふ風に、輕卒に斷定するのが、ヴアルガ等の悲觀論の特徴點であるが、これは少し事實を無視した獨斷ではないかと思ふ。

具體的にもう少し立ち入つて檢べてみても、今日のアメリカの經濟は、この儘惡化するには尙ほ健全過ぎるものがあると思ふ。例へば生產力が非常に殖えたといふが、勿論、生產財の部門に於て、消費財の部門に比べて、最近は少しく均衡を失する增產を行つた。しかし、この生產財部門に於ける生產增には、尙ほ、その根底に、永い間更新すべくして更新されなかつた、いろ〳〵の建設的な需要が、潛在的にたまつて待機して居たのである。その需要が各方面に於て、充分滿たされてしまつたかといふと、まだ、そこまでは遙かに到つて居ないと思はれる。

一體、生產財部門が、よくなりかけて來たのは、こゝしばらくの間のことで、工場建設

や機械の需要にしても、決して充分更新されて居るところまで行つてゐない。まだ前途には、相當大きな潜在需要が待機して居ると見ていゝのである。

消費財方面に於ても、勿論、まだ一九二九年のレベルに比較すれば遙かに低い。だから、ブーム狀態――即ち恐慌へと轉落する前のブーム狀態と比較すると、今日は遙かに健全なものではないかと思はれる。

次に金融方面を考へると、恐慌の初まる前には、資金の不健全な需要が激增して、金利が暴騰して來るのだが、さういふ傾向は、決してまだ今日は現はれて居ない。金利は依然として極く低いのである。

更に金利の中に於て、長期資金と短期資金と比較すると、短期資金がまだかなり、低いレベルを維持して居る。之も健全な兆候といへよう。又、物價の點から考へても、ブームと考へられるやうな暴騰は決してあらはれて居ない。

一體、一九二九年と、今日と比較するといふことが、屢々專門家によつて行はれて居る

が、一九二九年と今日の間に既に八、九年の時の流れがある。だから、生産が一九二九年のレベルに近付いたからといつて、今日の經濟が非常に危險なブーム的膨脹時代に來たといふ風に、一概に考へることには疑問がある。

さういふ風に、種々の角度から考へてみると、アメリカが、この儘、反動恐慌に轉落するであらうといふ豫想は、どうも妥當ではない。恐らくは、遠からず、ルーズベルトの統制的な救濟政策が再び發動されて、これを引戻すのではないかと考へられるのである。

アナリストに出て居たアメリカのある大學教授（ブラット）の論文によつても、今日は、まだブームから恐慌に轉落する時期ではないといふやうな意見を述べて居た。大體その根據は、我々が今考へてゐたやうな筋途に合致して居るやうである。又、パウル・アインチヒが最近中外商業新報への寄稿に於て、論じてゐるのも、人爲的なインフレ操作が強く働く今日では、景氣循還は中斷されるといふ主旨であつて、大體筆者の考へと合致してゐる。

それに、最近特に注目すべき現象はルーズベルトがいよ〳〵大軍擴工作に乘り出してき

たことである。かうなつて來ると、その景氣振興的効果は今迄の公共事業工作よりも直接に建設部門に大きく作用する筈であるから、今後の景氣の動きは相當恢復的になつてくるのではないかと思はれる。

かうして、世界の軍擴熱は今や米國さへも、その熱病にとりつかれてしまひ、それによつて、又、新な一般的の波及力を益々強化しやうとしてゐるのである。

かういふ新しい世紀の動きの下に於ては、も早、自由主義時代の景氣論の如きはその根底をくつがへされてしまつたといつても大過ないと思ふ。

五、米國景氣の轉落と世界經濟

とも角、筆者は今日アメリカが、この儘恐慌狀態に轉落するとは考へられないと樂觀するのであるが、假にアメリカに恐慌狀態が生ずるとしても、それが果して世界恐慌にま

で波及して行くかどうかといふことには、又、大きな疑問がある。今迄アメリカは、なる程軍擴工作をあまりやらなかつた。しかし、ヨーロッパ諸國及び日本などは、盛んに軍擴工作をやつて居るのである。

この軍擴工作は先程述べたやうに、營利的な條件如何に拘らず、强行されなければならない强力な國家的な推進力の作用の下にあるのである。國際的な政治關係が益々險惡になつて、この軍擴工作は、益々熱狂的に押し進められて行く必然的な運命の下にあるといつて大過ないであらう。

さういふやうな性質の軍擴計畫といふものは、アメリカの景氣が惡くなつたからといつて打ち切られない。

アメリカの景氣が惡くなり、延いて、原料供給國の景氣も惡くなるといふことになれば、列强の軍擴工作には、いろ〳〵財政上その他の困難が加つて來ることは、爭ふべからざるところだと思ふが、併しながら、この困難が加つても、それは一方には國家統制を益々强

化するといふ手段によつて、これを克服しつゝ、一意軍備充實を急ぐといふのが、今後の列强の經濟政策上の態度ではないかと思はれる。

現に十五億ポンドの五ケ年大軍擴計畫に乘り出してゐる英國の場合をとつて考へてみても、米國の景氣が惡くならうとなるまいと、かうなつた以上、歐洲に於ける國際狀勢の根本的激變なき以上、どうして此の軍擴工作を中止することが出來やうか？　いはんや今日では、米國さへも大軍擴をやり初めやうとするのであるから、その刺戟を新にうけて英國の軍擴は益々拍車をかけられる一途のみであらう。

ともかくも、かういふやうになつてくれば、國民生活の水準は引下げられ、大衆は次第に大きな犧牲を忍ばなければならないやうな狀態に押しやられるといふことは事實であらう。

しかし不景氣による失業群の慘めさを考へれば、大衆と雖も働けるだけ遙に幸せだともいはれやう。又、かうした統制經濟が直ちに經濟的な混亂を引起すやうなパニツク的の打

擊を列强の財界に與へるかといふと、おそらく、それは非常な疑問である。

前にも述べたやうに今日の世界經濟を支配して居るところの原則が、必ずしも營利經濟ばかりでなく、有力な國策經濟の要素が、そこに加つてきて居るといふことから考へてみても、どうもアメリカの恐慌が、直ちにヨーロツパに波及し、それが延いて日本に迄波及して來るといふ風に、簡單に公式的に考へることは早計ではないかと思ふのである。

ともかく世界的な大恐慌が、必然にアメリカの恐慌に次いで起つて來なければならないと見るべき根據は薄いやうである。いはんや、アメリカの恐慌化それ自體が、今や大なる疑問となつてきてゐるのであるから、前途をさう悲觀するのは無用であらう。

第四篇

これからの日本經濟界はどうなるか

一、積極策で一貫する今後の指導方針

ところで、日本經濟界であるが、之は勿論、今迄は自由主義――資本主義の機構の上に立つて居るのである。

併しながら周知の通り、各方面に非常に強い國策的な統制が行はれて來て、それが次第に普及し、強化される傾向がある。

對支戰爭が一段落すれば、それによつて、經濟狀態は元の平和經濟に歸る、從つて戰時經濟は解かれ、自由主義經濟に復活するであらうといふ風に考へることは、極めて皮相な見解で、好むと好まざるとに拘らず、統制強化は一意進んで行くものと筆者は見てゐるのである。

といふのは、日本の國際的環境と日本の國民的輿論にまで強まつて來た大陸的な積極政

策、又は南進政策が打切られないのであるならば、（又これを打切ることは到底出來ない事情の下に來てゐると思ふが）日本は、益々大きな國際的フリクションに直面しなければならない時代である。

イギリスとかロシアとか、その他非常に重大な障害物に直面して、その政策を進めて行かなければならない事は既に周知の通りである。又一方に於て、生産力の擴充工作といふものは、今次の事變によつて始めて行はれた政策ではないのである。

我々が數年前から主張し、國是となり來つて居るものであつて、戰爭のあるなしに拘らず、強化さるべき必然的な要求であつたのである。だから、戰爭が濟んだからといつて、打切られるといふことは絶對にない。寧ろ戰爭に刺戟されて、更に擴大され強化されて行くべき運命のものと思ふ。だから財政の膨脹も公債の增發も或は相當多額の增稅も各般の經濟統制政策も、總て戰爭の一段落と共に緩和されずして、寧ろ益々強化されて行くのではないかと思ふのである。

その前途の困難さを考へると、遠からず、日本の經濟も今日のドイツナチスのやつてゐるやうなところまで行く外ないのではないかと、筆者はひそかに考へて居るのである。

ソヴエート・ロシアの社會主義的機構のやうに變革されるといふ事は、萬々ないものと思ふが、併しながら、ドイツ・ナチスの止むを得ずして採りつゝある今日のやり方——勿論ナチスに於ても、好んで斯くの如き國家干渉、斯くの如き全面的統制をやつてゐるのではないと思ふが、いろ〳〵な事情から止むを得ず、かういふ狀態に立ち至らしめられたものであらう。それと同じやうな狀態が日本の前途にも待機して居るのではないかと思ふ。財政膨脹と、反面に於ける惡性インフレの阻止の必要、さういふやうなことだけを考へても全面的に經濟統制の强化は必要である。

勿論、そのやり方は巧くやるのと、拙劣なやり方と技術上色々に研究の餘地はある。又、ドイツ流のやり方と、新興日本流のやり方とは自ら相違するところがなければならぬ。

民間のエキスパートは、政府を援けてこの工作を出來るだけ有効に、適切に進めて行く

ことが、國家に寄與する途であらうと思ふ。これは畢竟大勢の認識いかんによることであるが、もし、この途を回避して自由經濟に復歸するやうな保守的なこと許りを考へて、行動しやうとすると、恐らく、社會的な大きなフリクションが生じ、その結果、經濟界が嘗て見ないやうな××××××××××××危險が多分にある。

さういふことは國家進展の上から見て、非常に好ましからざる現象であるから、出來るだけ民間の財界人は、日本の國際環境とその發展の大勢とを見定めて、それに順應するやうに戰後の政策を押し進めるために、政府と協力することが、奉公の責務であると思ふ。

さういふ風に筆者は考へて居るから、今後は或は海外の景氣の惡化によつて、政策の遂行に相當の支障を來たす虞があるかも知れないが、しかし、これによつて日本の積極的な生產力擴充工作が、打切られなければならない程の影響を蒙るとは考へない。

勿論、アメリカが惡くなり、外國が餘り品物を買はなくなれば、それに連れて輸出が惡くなり、從つて、原料は輸入困難とならう。

現に昨年末から米國が惡化したゝめに、日本の輸出はかなり大きい打擊をうけて、減退の色をみせてきてゐる。從つて、もし、かういふ海外の事態が最惡の場面を辿るとしたらそれに應ずる貿易の統制管理も强化されるであらう。

さういふ場合に輸出の促進といふことは、多分に國策的な色彩を帶びて來て、例へば、非常に損が行つても國家が助成金を出して輸出をダンピングさせる。さういふことは單純な經濟採算を無視する國策的な必要から、割出される行動になつて來るといふ傾向が、段々强まつて來なければならない。

だから、假に外國が惡くなるとすると、日本の非常時對策も大分苦しくなつてくる。從つて反面に、隨分無理のある統制工作も採られなければならなくなる。

しかし、海外が早晩新軍擴工作の御蔭で景氣を恢復してくるやうだと、日本の工作も餘程凌ぎよくなる。さう無理をしないでも外國へ品物がよく捌けると、軍擴の賄ひも大分樂になるのである。

そして、結局は、此の後ちの場合が今後に待機してゐるものと樂觀してよろしいのではないかと思ふ。

二、新興重工業國日本たるの自覺

ところが政府でも、財界人でも、筆者とは全く逆に世界恐慌のことを今日から、すこぶる悲觀し、從つて、當面の日本の積極政策にも、大なる不安をいだいてゐる人々が少くないやうである。

しかし、かういふ悲觀や躊躇は、全く時代錯誤の產物だと信じるのである。

一體、大陸の未開、處女資源を積極的に開發することによつて、將來の國際競爭に益々優越した土臺を作り上げ、そして新しい設備と新しい技術と、非常に豐富な資源とを土臺にして、將來の大きな積極的進出の用意をする。かういふことは、假に、戰爭があるなし

に拘らず、日本の今後數年間或ひは十數年間に於て採らなければならない絕對的な工作である。といふことは、日本は此の積極政策への經濟的な合理的條件を備へてゐる。決して、單純な戰爭を目標としたゞけの自給政策的な要求によつてのみ、之を强行して行くものではない。經濟的な合理的な新興發展といふ一つの大きな特徵を有つて居るのである。

今まで死藏されてきた未開處女資源を開發することに依つて、重工業の土臺が改善され、加工的な諸工業の土臺が改善され、その新鋭な產業を武器として將來の國際鬪爭に進出して行くべき條件が出來上つて來るのであるから、目先きの財政を膨脹させ、公債を增發することも、決して不健全な政策といふことは出來ないのである。

公債の增發を徒らに心配することはないといふ議論が、有力な日本の一部の識者の間に唱へられてゐるのは、多分に根據があると思ふのである。

勿論、其のやり方の巧拙は愼重に考へなければならないが、大局から見ると、日本は、やはり積極政策を進めて行くべき充分な合理的經濟的條件を有つて居ると思ふ。此際、餘

り傳統的な不安などに拘らはれずに、大いに前進政策を勇敢に進めて行くべきだと思ふ。

さういふ譯であるから、今日に於て、國家當事者の執るべき途としては、一日も早く戰後の積極政策に對する肚を極めて、それによつて、民間の財界人に戰後國家の執るべき具體的工作のアウトラインを示し、そしてビク〳〵しないで積極政策に順應するやうな指導をすることが必要である。

三、發展性豐かな日本重工業

一體、近頃、一部の論客の間に日本の重工業化運動が、世界景氣の反動に伴つて行き詰つてしまふであらうといふ悲觀的議論が雜誌あたりに出て居るが、筆者は、これには全然納得出來ないのである。第一、世界恐慌が必ず近くやつてくるといふ見方が疑はしいのであるが、かりに世界恐慌が來たとしても、日本の重工業がその重壓でつぶれてしまうか

どうかは、一層疑問である。悲觀論の人々は、日本の重工業といふものが、今日、自然的條件に於て、如何に歐米諸國の重工業に較べて優越したもので、天惠厚いものであるかといふことを、十分に研究されてゐないのではないかと思ふのである。

日本、滿洲、北支那を採り入れ、更に南洋の資源を低廉な運賃で利用し得る日本の今後の重工業といふものは、既に、歐米諸國の專門家が明確に結論して居るやうに、近き將來に於て、最も怖るべき世界的な競爭者として、立ち現はれて行く可能性が十分あるのであつて、今日でも國內の軍事的な要求が少し緩めば、支那から南洋、遠く中、南米、その他、至る處に日本の重工業品は、どん〳〵進出して行くだけの鬪爭力を有つて居るのである。

かういふ自然的條件の上に、國家がしつかりと輸出助成工作をやりさへすれば、今後海外の景氣が惡くなつても、日本の重工業の前途は、決して暗いものとは思はれない。

又、此の將來に備へて日本が重工業化運動を進めて行くといふことは、十分見込みの立つ立派な發展的工作だと思はれる。

現に、今日の鐵工業家などは、多少の反動が來たつて、それを乘り越へて將來の世界市場の征服の爲に、遠大な準備を進めてゐるのであるといふことを明確に自覚して工作を進めてゐるのであるから、さう簡單に公式的に世界市場が悪くなる、日本より先進國の方が優越した重工業的な機能を有つてゐるから、日本の幼弱な重工業は押しつぶされるだらうなどといふのは、十年も二十年も前の日本の技術や自然條件を前提とした考へであつて、迚も今日の實情に即した公正な結論だとは言へないやうに思ふのである。勿論、景氣が悪くなれば、直接に當面の進出は困難にはなるけれども、併し、そのために重工業化が押しつぶされるといふのはまちがいで、少し永い目で觀れば、日本が重工業的に東洋を支配し、更に、全世界的に進出して行くといふことは決して見込みのないことでなく、寧ろ甚だ有望なのではないかと思ふ。

まして、北支那から將來は中、南支、南洋の市場を手近に有つてゐるのであるから、さういふ方面に喰ひ込んで行くといふことは、非常に有望である。此點は餘程自信をもつて

見直すべきだと思ふ。

四、財政、金融工作は心配無用

さて、以上のやうに根本的に發展的な立場に立つて、もう少し、財政、經濟の內面に就て、部分的な檢討を加へてみることにしよう。

第一は、財政・金融が、果して行き詰るやうなことが起りはしまいか？——といふ點に觸れてみよう。

なるほど、日本の財政、金融が、目先き、かなり、やりくりが困難なことは否定する譯には行かない。しかし、それは日本の重工業の生產力がまだ充分に擴充されてゐないためであつて、實は困難なのは金融的處置ではなくして生產力の不足なのである。それをどうしたら早く擴充出來るかといふ技術的問題なのである。此點に就て興味あるのは、日本と

ドイツとの比較である。

周知の通り、ドイツは戰敗國であつて、國内の資源が外國に奪はれて了ひ、非常に困つた國ではあるが、それでも再起の勇氣に燃えて最近ナチスになつてから、年々七、八十億マークの巨大な軍事費を捻出して行つて居るのである。

最近バンカーと言ふ有力な外國雜誌を見ると、ナチスになつてから、最近迄の四年間に於て、三百十一億マークを軍事費に捻出したと言はれて居る。

即ち、毎年平均して七八十億マークとなるのであるが、之は英國の六億磅以上に當るのである。

ドイツのやうな戰敗國でさへも、年々かうして百億圓以上の金を軍事費に投じてゐるといふことを考へると、日本が十億や二十億の金を軍事費に投じることの如きは、寧ろ何でもないやうな子供騙しのやうな感がするのであるが、それが實際は決してさう容易なことではない。といふのは、ドイツは、日本より非常に大きな國防産業力を既に持つて居るの

であるから、百億圓の軍事費も消化出來るのであるが、日本は、殘念乍ら、この國防産業がまだ〳〵貧弱であるから、今後伸びて行かなければならぬ。

そこで、目先き大きな軍事費を使はふと思つても、さう無暗に金を使ふ譯には行かんのであつて、少しく大掛りな軍備擴張をしやうとすると、國内の産業は直ぐ手一杯になる。

だから、財政膨脹の限度といふものは、技術的に限られて居るのである。

何でも金さへひき出せば、それで仕事が出來るといふやうな考へ方は大間違ひであつて、資金の捻出の如きは第二義的の問題であり、大切な問題なのは、生産技術の能力發展である。

勞働者、設備及び資源といふ樣な點に於て、日本の軍事産業といふものが、どれ丈の需要に應じ得るか、どうしたら之を早く伸ばせるかといふことをハツキリと調査して、その發展の線に沿つて財政膨脹を調整するより外はないのである。

此の生産能力を無視して、無暗に資金關係の膨脹を齎らすといふやうなことになれば、

當然、惡性インフレーションになる丈けであつて、結果としては、少しも國防の充實にはなり得ないのである。

結局、一日も早く、出來る丈け能率よく、全國力を動員して、國防產業の充實を計らなければならぬといふのが、今日の急務であつて、之を促進するためならば、今述べたやうに、財政の膨脹、信用のインフレーションといふものは絕對に避くべからざる事であるが、問題の本質からいふと、これはなにも、さう心配する性質のものではない。本質上、第二義的な重要性のものなのである。

五、統制金融の動向

現に、ドイツ等をみても判るが、資本がなくて、何うして、そんなに三百億の軍事費を捻出したかといふと、これは結局、大藏省が短期手形を振出して、それを借替へ〳〵して

擴張して來たのである。

今日でも二百億マーク近くの短期手形が銀行の藏の中に收まつてゐるのである。つまり短期手形を出して——ドイツの遣方は、日本の遣方と一寸違つて居るのであつて、例へば、公共事業を起すとすると、國策會社としての公共事業の信用會社といふものを作つて、さうして、政府が民間の土木事業者に或る註文を出す。さうすると、その註文を以て、それに必要な原料を買入れ、設備をする爲に公共事業の金融會社に行つて、金を借りる。さうすると公共事業の金融會社が裏書して手形を振出して貰ふ。さうしてその裏書された手形が、更に中央銀行の裏書を經て、——即ち中央銀行で裏書されたことによつて、金融力を持つてくる。

大體その手形は、三ケ月乃至六ケ月位の期限の短かい商業手形のやうなものであるが、これは期限が來れば、切替へ〳〵て今日迄遣り繰りをして來て居る譯である。中央銀行、即ちライヒスバンクの裏書があるから、結局、民間の金融機關が之を何時でも割引してそ

れに金を貸す。從つて民間の銀行の藏の中には、さういつた公共事業手形や國防手形といつたやうなものが充滿して居るといふ譯である。

何故民間の銀行がさういふものを買うか？——つまりこれは短期手形といつても、日本で言へば、公債を振出して、それを銀行が消化したと同じ形ちになつて居るのであるが、何故銀行がさういふ手形を買ふかといふと、結局、資金調整法が徹底的に行はれて居る爲に、特殊國策的な建設用の資金需要以外には、民間の需要が全く抑へられて居る。

それは、この民間の國策的資金の需要を反映して居る處の、さういつた短期國防手形の外に民間の金融業者の投資物件は乏しい。

かういふ譯で、いやおうなしに此手形を買うのであるが、そこが官民金融界の美事な協力の結果、圓滑な進行をみてゐるのである。

日本でも資金調整法は、益々今後撤底的に強化されて行つて、一方に於て政府の公債增發に依つて、資金が民間の產業界に放出されても、それを勝手に自分の好む處に使ふことが出來ずして、已むを得ず民間の銀行の藏の中に入つて來て、さうして、民間の銀行も亦これを勝手に投資することが出來ずして、公債を買はなければならんやうになる時機がくるであらうかと思ふ。

最近に某大銀行の指導者に會つて、時局談を聞いて居た時に、矢張、結局、吾々銀行業者は公債を買はなければならんやうにされるのではないかと言ふことを述べて居たが、恐らく、筆者が今述べたやうな筋道を、考へて居たのではないかと、想像して居る。

勿論、さうなる迄には、日本はドイツとちがつて、現に民間の建設資金の需要が旺盛であるから、民間に放出された政府の資金が直に空廻りして、銀行の藏の中に入つて來るといふ狀態に迄は未だ早急にはならんと思ふが、段々建設工作も進んできて、基本的な建設が一段落するに伴れて、段々とさういふ狀態になる。それ迄の暫くの間は、これはもう仕樣がないから、日本銀行なり、預金部なりが一時公債を背負ひ込むといふ形を取つて來る以外に方法はない。

そうして、民間の資金の需要が一段落をし、さうして一方に於て政府の放出する資金が、段々殖えて來てそれが已むを得ず銀行の藏の中に溜つて來る時期を見て、ポツ〳〵と公債の消化に乘り出すといふやうな傾向をとつて行くのではないかと思ふ。

日本では金融が直ぐ著しく弛むといふやうな事は考へられないが、さればといつて、金融が逼迫して金利が撥ね返つて來るといふやうなことは、今のやうな統制經濟の下に於ては考へられないのである。

現にドイツなども、低金利と資金の調節の徹底的な強化とが併行して進んで居るのであつて、一方に於て今述べたやうに、政府が資金を放出するから、民間の産業界に購買力は入つて來るが、それを勝手に使ふことが出來ないから、結局、それが銀行の藏の中に入つて來て公債を買込む。それで一方に於て、低金利政策を取つて居て、公債の消化及び國策的に必要な事業の資金の遣り繰りに出來る丈けコストの安い金を廻すやうに銀行業を鞭撻する。即ち、資金の用途を制限することによつて、公債と國策事業とのために安い金をま

はしてやる。かういふ風に、低金利と資金の調節とが、併行して進むことに依つて、統制ある新しい金融政策といふものが進行して行くものと思ふのである。

公債政策の前途を考へても、低金利を逆にするといふやうなことは、絶對に出來ない譯であるから、これは恐らくドイツと同じやうに低金利と資金調整の強化との併行で進んで行く外はなからうと思ふ。

六、貿易と金現送の問題

さういふことになれば、消費の節約といふやうなことも、勿論もつと徹底的になつて來るであらう。貿易關係から言つても、未だ今年度邊りは、盛んに外國から建設財や原料を買はなければならんであらうから、（かりに輸出が、さう惡化せぬものとしても）貿易の統制といふものは、益々强まつて行くと見なければならんと思ふ。

金を現送するといふことは、勿論やるであらうが、果して、日本銀行の準備金に迄手を付けるかどうかといふことは、興味ある疑問になつて居るやうである。必要とあらば、日本銀行の準備金にも手を付けることも已むを得ないと筆者は思つて居る。

勿論、どんな物でも買ふことを自由に許して置いて、準備金を送るといふやうな政策は取つてはならないのであるが、たゞ國策的に必要な建設的な資材を買込むといふことに對しては、大膽に金を送るといふ積極政策を取るべきであると思ふのである。

但し、最近政友會邊りで一部の人が唱へてゐるやうな爲替の低落を無視した議論は、賛成出來ない。そんなことをしても、輸出の增進は疑問であつて、結局惡性インフレをまねく以外に得るところは少いからである。

七、物價は上昇の一路のみ

物價は輸入の統制もあるし、それから一方に於て軍事的な事業の膨脹もあるしするので、大體的には高くなるとみる外ないのであるが、國際市場、殊にアメリカの狀態などの動きに依る影響も相當あるのであるから、目先きは一概には斷定出來ない。

アメリカは、最近は周知の通り非常に惡くなつて居る。これは色々な原因はあるが、主としてルーズベルトの採つて居る一種のニュー・デイルと呼ばれて居る處の、統制政策の影響を受けて居ると思ふのであつて、ルーズベルトの採つて居る遣り方は、資本主義の立場から言ふと、必ずしも喜ぶべき方針ばかりを取つて居るのではないのであつて、例へば、大衆の購買力を殖やすといふ名目の下に賃銀を强制的に上げて見たり、資本課稅を大膽にやつて見たり、或は證券の取引を抑制して見たり、色々資本の嫌がらせをやるやうなことをやつて居るので、ニュー・デイルをやると、必ずしもアメリカの景氣といふものは、爆發的に好くなることは出來ないであらうと思ふが、併し乍ら、アメリカは何しろ金融界に金がどつさりあるのであるから、いざインフレーションをやる氣になつて政策を

換へて掛れば、經濟界の動きを一變させることは決して困難ではないと思ふ。

殊に、最近は軍擴工作に乘り出して來たやうであるから、アメリカの景氣も又建直つて來るのではないかと思ふのである。

アメリカが好くなれば、イギリスが惡くなる譯がないのであつて、國內には軍擴計畫があり、又このアメリカの影響を受け、間接には原料國も建て直つてくるであらうから、イギリスと雖も前途は決して惡くなるとは思はれない。

さうなると、外國の影響を受けて、日本の物價がいつ迄も安いまゝで居るといふやうなことは考へられないのである。

いはんや、大勢的にはたとへ外國は安からうとも、日本の物價は國際水準よりも漸次相當の割高になつて來てゐると觀なければならない。政府としては價格公定や配給の割當て等を强化して、原料や生產品の暴騰を抑制することに乘り出してくるであらうが、それにしても大勢的上昇を防止するのは、容易ならぬことゝ考へられる。いはんや、これら以外

の商品の暴騰迄防ぐことは到底不可能のことであらう。

八、跛行景氣の激化

大體に於て、日本の景氣が惡くなることは考へられないが、その片寄りは益々激しくなつて來ることは已むを得ないと思ふ。

しかも、この片寄りは產業部門間に於ける片寄りと、產業內部に於ける大工業と中小工業との片寄り、といふ風に兩面から考へられなければならんのである。そして此片寄りからくる壓迫に對する充分なる施設が、今日の處に於ては、未だ出來て居ないことは遺憾である。

今後の問題は、その片寄りを、——片寄りそれ自體は、戰時經濟をやつて居る以上は已むを得ないことであると思ふ。といふのは全能力を國防產業に集中するといふこと

は、これは已むを得ない非常時的な要求であると思ふが――それに伴ふ處の色々の社會的弊害を出來るだけ緩和する工作は、政府の全責任を以つてやらなければならん處の急務である。その方面に對する政府の施設は、今日の處は遺憾乍ら、未だハツキリあらはれて居ないやうである。而して、持久戰といふことになれば、所謂荒廢産業の移轉及び移轉出來ない産業に對する救濟の施設といふものは、今後に於ける重大なる問題になつて來なければならんと考へる。

戰後の産業復員の問題も軈て考へられなければならんことであるが、商工省や厚生省其他に於て、さういふ問題は一日も早く考究されることを切望する。

九、爆發景氣は出るか？

又、全體として景氣が悪くなるとは思はないが、併し爆發景氣といふものは、今後の戰

時經濟に於ては到底許されないことである。

ドイツなどを見ても、あれ程全能力を擧げ生産力が動いては居るが、利潤は事實上制限されて居る。從つて株の値段はそれ程上つて居ない。尤も不景氣の時分から見れば相當恢復はして來て居るし、從つて産業が遣り切れないやうな、さういふ悪い狀態には勿論なつて居ない。全能力を擧げて産業が働いて居り、相當の儲けを擧げて居ることは事實であるが、矢張り爆發景氣といふやうなものは、あれ程の大膨脹豫算を組んで居るにも拘らず、抑へられて居る。これは全面的統制と租税政策等の影響をうけて、所謂價格景氣から數量景氣の方に景氣の性質が移つて行つて居る。景氣の跛行性即ち片寄りもドイツに於ても、相當顯著に表はれて來て居るやうである。

生産財と消費財との間の物價の開き、輸入品と國内品との開き、それから國内向の産業、殊に大衆向の産業と軍事産業との間の大きな開きは、ドイツでも鮮明にあらはれてゐる。問題は斯ういふ事實に對して、如何にその弊害を緩和する方策を採るかといふことで

ある。

十、多難な輸出貿易の前途

最後に、貿易の問題も今までは輸出が何うやら增えて居たから、未だ良かつたのであるが、若しイギリス邊りと衝突をするやうなことがあるとすると、戰爭が無いにしても、經濟的には相當大きな壓迫を受けることになるのであるから、輸出の狀態が、果して、今迄のやうに順調に行くか何うかといふことは、これは、疑問だと思ふ。既に昨年末邊りから輸出は明に減少してきてゐる。之は主としてアメリカ惡化の影響ではあらうが、一方に於て、輸入統制の影響を受けて、物價が海外より割高になつて來て居るので、コスト高の關係或は原料入手難等の關係から、輸出向產業には漸次支障が起つて來るであらうし、それを如何にして切拔けて行くか、ドイツなどでは輸出の增進の爲に國內の消費を極端に節約

して、政府が助成金をやつて、ダンピングをやらせて居る。

ロシヤなどでも、一時國內の大衆を非常に饑饉に陷らせて迄も、已を得ざる輸出投賣りをやつて居た時代がある。漸次日本の戰時經濟もさういふやうな切迫した場面に、追ひ込まれて行く傾向があることは、已むを得ないことゝ思ふ。

ともかくも、これからは輸入の制限と同時に輸出增進のための眞劍な工作が各方面で熱心に採られねばならぬことゝなつてくるであらうが、それの奏効はさう簡單には望めないことである。それが即ち非常時の非常時たる所以であつて、日本の直面して居る國際的な反響の重大さ、日本の國運の歷史的な難局は、かうした形で經濟界にあらはれて來てゐるのである。

十一、前途は大樂觀のみ

以上の諸點を、よく理解して、産業界が積極的に、成るべくこの國策を維持促進するやうな頼もしい政策を、自發的に打ち樹てて行く必要がある。つまり國運促進の積極的な大勢に順應して動くやうな傾向を取つて進んで行くことである。もし、之を怠るやうだと所謂官僚獨善的な國家統制になる心配があるのである。

獨善的な國家統制は、勿論これを排撃しなければならないが、産業界の方が國策を無視して勝手な事をやつて居ると、已むを得ず國家統制といふものは強まつて來ざるを得ないのである。時局を充分認識して、産業界の方から積極的に動いて行くといふことが、圓滑に、この國運の重大なる時局に善處する所以であると信ずる。

要するに、種々の困難はあるが、わが國の經濟界はドイツなどとちがつて、大戦に打ち挫かれて、押しつぶされ、生産力が混亂せしめられてしまつたのとは、根本的に事情がちがつてゐる。

當面、甚だ苦しいにはちがいないが、それは謂はゞ大飛躍的發展のための基礎工事の建

設をやつてゐるのであり、生産力は日進月歩で劃期的増大を示して行つてゐるのである。だから、目先きは苦しくとも、それは苦しみ甲斐の充分ある時代なのである。さういふ根本的な建設的態度をもつて官民協力して、當面の事態に善處するならば、財界の前途は必ずや光明裡に發展しつゞけて行くものと信ずる。

前にも一言したやうに、こんなに生産力を擴大させてしまつてあとはどうなるのだらうといふ風な心配は、一見もつともらしい心配でありながら、實は、日本の正に遂行しつゝある大變革的な偉業の役割りを認識して居らないから生じる、時代錯誤的な考へに外ならないと思ふ。

此點今日の日本は世界大戦直後の日本とは全く位地が異つてゐるのである。今日の日本は支那から南洋にかけて冬眠してゐる大資源を開發してやり、從つて、彼等からは原料類を益々盛んに買付けてやると同時に彼等に向つて今後は益々多量の完成品を賣り込む。そして相互に手をとり合つて新興世界の發展のために努力するといふ歴史的な建設的役割り

を果す時代に立ち入つてきてゐるのである。幸ひ、こゝ數年來日本の重工業や化學工業が實に目ざましき發展を遂げつゝあるので、これらの產業を武器として後進諸國の開發のために大いに積極的な寄與をなさねばならぬ。それは、日本の今日持つてゐる程度の重工業や化學工業位では實はまだ〳〵力が足りないのであつて、當分の間はまだ〳〵、ドシ〳〵生產力を擴充、强化させて進むべきものだと信ずる。

なんといつても大陸開發工作――これこそは今後少くも十數年間に亘つて、日本の全產業界の躍進に力强き拍車をかけるに足る大事業でなければならぬ。

大陸開發工作といふ大目標を中心として日本の產業界は全能力の發揮を强要される。又、それを契機として、產業構成も歷史的な變革を遂げさせられる。新興重工業や化學工業が內地から大陸の工業地へドシ〳〵進出して行つてブロック全體としての工業中心地の大移動さへも起りさうな豫感がするのである。

時代は、ともかく、非常に大きな成長的氣運にあるのである。政府の統制方針も結局

は、この大發展を効果的に促進し、指導するのが根本的な眼目なのであるから、財界人も統制々々といつて、頭からびくつく必要はない。官僚の方でも餘りこせ〳〵と產業界を束縛してしまうやうな『統制のための統制』といつた風なやり方は之を避けるやうに心掛けるべきである。歐洲流の統制のやり方がそのまゝ日本に通用出來ない理由を充分理解して善處する必要がある。折角の發展的氣運を阻害しないことが肝要である。かくて、官民相互に理解し合ひ、信賴し合つて、國運の隆昌に協力する態度で進むならば、經濟界の前途は大樂觀の外はないと信ずる。

第五篇　伸び行く日本重工業の雄姿

一、重工業は産業發展の鏡

本篇では日本の重工業の伸び行く姿に關連して、少し立ち入つた展望を述べて見たいと思ふ。

重工業といふと、鐵や石炭を中心にして、それらの基本的の産業の上に立つてゐる機械工業、造船業、自動車や航空機の工業といふやうな物を含めて、考へられてゐるやうである。

此重工業は、大體、日本では割合に新しい産業であつて、最近、滿洲事變が起つて以來、特に、國策的の必要から國家が強く之を奬勵し、助成してゐる爲に、特に急激な發展を來して來たのである事は、周知の通りであるが、大體、今日の世界の産業國では、どの國でも、重工業に於て、極めて顯著な發達を遂げてゐるのである。否此の重工業部門が盛んで

あるといふことが、それらの國々をして一流の産業國として、活躍させてゐる所以なのである。といふのは此重工業は高度の近代技術と巨額の固定資本とを要するから、到底幼弱な後進國では、これを盛んに起すことがむづかしい。どうしても進歩した産業國でなければ、此重工業は盛んにならないからである。

さういふ意味で、日本も産業國として飛躍する過程に於て、どうしても重工業の健全なる發達に俟たねばならぬ事は、いふまでもないのである。

二、資源貧弱とみられた日本

色々の關係から、日本は今まで是らの部門に於て、殆んど、國際的の水準以下にあつたのである。

なぜ重工業が、日本で今まで十分な發達が、出來なかつたか、此事はなにも國家の助成

が足らなかつたためではない。特に一般にいはれてゐる大きい原因としては、國内に十分なる資源がなかつた。このためにコストが高くついて、此産業が發達出來なかつた。重工業の資源といふと、大體鑛石と石炭を指してゐるのである。

石炭の方は國内に相當ある事は、現に最近は四千萬トン程度の年産額があつて、相當石炭は自給自足してゐる狀態である。

尤も嚴格にいふと、先進國所謂重工業國の石炭と比べると、コストが高い、或は品質に於て特に重工業が必要とするやうな、粘結性の強い石炭が貧弱であるといふやうな質的の缺陷が擧げ得られるやうであるが、之も併し、最近は治金上の技術が段々發達して來て、必ずしも、是が日本の重工業を發達させる上に、致命的な缺陷であるといふやうには考へられぬやうになつて來てゐるやうである。

だから、石炭の方は大體どうやら追つ附くとしても、最も重大な缺陷といはれてゐるのは、鑛石が日本にはない。是は大體殘念乍ら事實であるやうであつて、國内の鑛石の資源

といふ物は、東北の釜石の近所に少しあるのと、北海道に少しばかりクチャンの近所にある位であつて、他には朝鮮に若干ある。これらを土臺にして先進國のやうな盛んな、大きな重工業を築き上げる事は技術的に極めて困難である。斯ういふ事がいへるやうである。

三、滿洲事變後は事情一變す

併し乍ら日本の國內に鑛石がないといふ事は、それが日本の重工業を發達させるに致命的缺陷であるかどうかといふと、昔は確にさうであつたかも知れないが、滿洲事變後の今日では、も早、決してさういふ結論にはならぬやうである。

といふのは、日本の國內には鑛石がないが、日本を圍む東南洋の諸國には、可なり豐富な鑛石があるのであつて、殊に、最近盛んに日本に持つて來る南洋のマレー半島、ヒリツピン、遠くは濠洲といふやうな地方には、極めて豐富な鑛石の資源のある事は確實であつ

て、從つて、之を日本で加工する事が出來るならば、此鑛石を土臺にして、日本の重工業を築き上げる事は決して困難でないのである。

日本にとつて幸なことには、これらの地方には鑛石はあるが、石炭がない。又高度の技術もない。マーケットもない。だから鑛石はどうしても日本へ持つてきて使つてもらふ外に吐け口がないのである。

夫から滿洲事變以來は、滿洲の資源が、日本の爲に開放されたが、此滿洲には鞍山を始めとして、本溪湖附近の大きい鑛石の山がある。

のみならず、最近には滿洲にはアトから〳〵大きい鑛石の山が發見されて來て、是は將來は非常に大きい埋藏量になる豫想が確實についてゐるやうである。

今まで滿洲の鑛石といふと、所謂貧鑛であつて、鑛石の內に鐵分を含む割合が、非常に少かつた。だから之を土臺にして鐵工業を作り上げるには、どうしてもコストが高くつくといふ點に於て、相當大きい難點があつた譯である。

ところが、昭和製鋼所で數年來、貧鑛處理法の特別な裝置が出來て、色々そこで苦心して此貧鑛を原料として鐵を作る工夫をしてゐるが、今迄はコストの點からいふと、どうも相當高くつくといふ事になつてゐたのである。

つまり貧鑛を固めて、そして、その中に含んでゐる特別の不純分を取つて、普通の鑛石と同じやうな品位の高い鑛石にして、これを原料にして、熔鑛爐に入れて使ふのであるから、それ丈け餘分の手間がかゝるので、どうしても、コストが高くなる譯である。

で、どうにかして此缺陷を克服しやうといふので、色々技術上の工夫が行はれて來て、段々最近割安に仕上げるやうな技術が利用されてゐるやうであるが、夫にしても此貧鑛丈けを土臺にして、重工業を作り上げやうとすると、どうしても特別の困難がある事は、覺悟せねばならぬのである。

處が最近幸な事には、滿洲の東邊道といふ所、そこは鞍山から東北にかけて、朝鮮の茂山の近くに迄わたつてゐるところ、此邊にかけて、東邊道一帶が大きな鐵鑛埋藏地である

ことが判つた。大體是は貧鑛ではなく、富鑛であつて品位の相當高い鑛石が多量に發見されてゐる。

夫から熱河にも、最近數千萬トン以上といはれる品位の高い鑛石が出たし、開原にも立派な鑛石が發見された。

斯ういふ立派な新鑛山などを土臺にして、滿洲の鐵工業といふものが、丁度今新しい技術的の飛躍のスタートに立たうとしてゐる時機のやうに考へられるのであつて、若し今後此富鑛を土臺にして鐵工業が起つて來るやうになると、滿洲の鐵工業といふものは、おそらく世界的に非常に有望なものになると考へられるのである。

滿洲ばかりではなく、北支政權の地域内にも、相當大きい鐵の山がある。之は龍烟といふ大きい鐵山であつて、支那人が曾て石景山といふ所に熔鑛爐を建てゝ、そこで鐵を造らうとした事があるが、是は大戰直後の恐慌に逢つて中途で沙汰止みになつて仕舞つたものである。

此龍烟の鐵山も相當大きく一億トン以上の鑛石があるさうである。是らを土臺にして今や北支にも大きい熔鑛爐を造らんとする工作が進んでゐる。それに幸ひなことに、北支にはコークス用の石炭が非常に多量に各地に發見されてゐる。滿洲にはコークス用炭が割合に乏しいといふので、心配する向きもあつたのであるが、今では北支の立派なコークス用炭をどし〳〵利用すれば、少しも心配はいらないことになつたのであるから、鬼に金棒の感がある。

四、南洋の豐富な資源

斯ういふ風に考へて來ると、國内の鑛石は貧弱である事は事實であるが、滿洲、北支、南洋、ヒリツピンには相當大きい物があるので資源的には、も早少しもひけ目はないのである。

ヒリツピンの鑛石は、特別の性質を持つてゐるので、之を利用するには、特別の熔鑛爐を建てねばならぬといふ技術上の一寸した困難があるが、是は既にアメリカにベスレヘムといふ大きい兵器會社があるが、此製鐵會社がアメリカでは、キューバの鑛石を使つて、スパロースポイントといふ所へ持つて行つて、キューバの鑛石丈けで大きい熔鑛爐を作つてゐるが、そのキューバの鑛石にヒリツピンの鑛石は非常に似てゐるやうである。埋藏量は極めて大きいものがある。

結局、ヒリツピンの鐵を土臺にして、日本で特別の大きい熔鑛爐が作られるといふ事が、考へられるのである。

夫からマレー半島の鑛石は、既に石原産業及日本鑛業あたりが、盛んに手をつけて、年々百數十萬トン日本へ來てゐる。

更に、最近では淺野とか、日本鋼管あたりも、ドシ〳〵堀出してゐる。これも相當大きい物であるやうである。

夫から、最近日本鑛業が濠洲のヤンピーサウンドといふ所で、大きい鑛山の利權を確保して、その鐵を日本へ持つて來る計畫を進めて、着々實行に移つてゐるやうである。遠からず、年產百萬トン位の鑛石を持つて來るやうになつてゐる。さうすれば、南洋の鑛石といふ物は、大體日本の資本によつて、日本の鐵工業の爲に確保されるやうな狀態になる。

その他支那の揚子江沿岸、大治、その他桃沖等といふやうな相當の鐵山があるが、これらも大體日本の資本を以て日本の製鐵業に原料を供給する事になつてゐる。

前にも一言したやうに、是らの南洋でも支那でも、鑛鐵はあるが、國內の社會的、經濟的狀況が製鐵業を起すにはまだ十分發育してゐない。或は石炭がないとか、國內に技術家がゐないとか、資本がないとか、需要がないとかいふやうな譯で、そこに製鐵業を起す事は、言ふべくして、行はれないので、從つて先進國が礦石を利用して、自分のところで製鐵する事に自然にならざるを得ぬのであつて、丁度日本の鐵工業の爲に今まで埋藏されたまゝ確保されてゐたやうな形に偶然なつてゐるのである。是らの鑛石が、日本に運び込

まれる事は、極めて自然な事でもあるが、又、コストの點からいつて、先進國に比して決して割が惡くはないのである。

周知の通り、アメリカの鐵工業は、石炭のある所と鑛石のある所が、何千哩距離があつて、その間、大きい湖を汽船で渡つたり、長い間鐵道で運搬したりして、熔鑛爐のある所へ持つて來る事になつてゐる。その距離は非常なものであつて、日本で南洋から鐵を持つて來るといふ事は、アメリカの事を考へると、決して不利でも何でもないのである。

夫れに、南洋から鑛石を持つて來る事は、大體船で運んで來るので、船の運賃といふものは、今日では極めて割高になつてゐるが、普通の狀態の時に於ては、鐵道運賃の十分の一位で濟む譯であるから、船で運ぶ事になると、汽車の場合に比べて、十倍の距離から運んでも、コストの上からいふと相違がないといふやうな關係になるのである。

であるから、外國でもドイツ邊りでは、最近スカンジナヴイアとかスペイン邊りから鑛石を持つて來てゐるのであるが、夫丈けで間に合はず遠く南洋まで手を出して、南洋の鑛

石に目を附けたといふやうな事が、最近盛んに新聞などで報道されてゐるが、夫れ程、遠くから鑛石を持つて行つても、海上運搬ならコストは餘り高まらぬのである。

だから南洋から鑛石を持つて來る事は、日本の製鐵業を確立させる上には、何ら缺陷にならぬといつて良い。

その上に、最近には先程述べたやうに、滿洲に品位の高い鑛石が、アトから〳〵發見せられるといふ事實は、益々、日本の製鐵業を强固なものにする譯であつて今日の鐵の資源に於ては、日本の製鐵業のコストは、先進國の製鐵業に比べて、むしろ可なり割安なのである。

かういふ譯であるから、今日の日本の重工業が資源貧弱であるなどといふのは、全く時代錯誤の考へ方で、とるに足らぬのである。

現に、米國に次ぐ世界第二の大製鐵國たるドイツを例にとつて比べてみても、日本がいかに惠まれてゐるかゞ判る。即ち、ドイツでは最近一年に鐵分にして九百萬瓲以上に當る

多量の鑛石を外國からの輸入に仰いでゐるが、しかも國內產のものといへば、品位三〇%臺の貧鑛なのである。目下、ゲーリングが主宰者となつて國營の鑛石會社をつくつて、盛んに國內の鑛石を堀る工夫をしてゐるが、これも大體三〇%臺の貧鑛を目當てにしてゐるやうな有樣で、いかに鑛石の入手に苦心して、條件の惡いものでもなんでも掘らうとしてゐるかゞ判るのである。しかも、滿洲や北支からみると、ドイツ國內のものなど、埋藏量が貧弱でとても比べものにはならぬ。

五、豐富且つ低廉な勞働力の强味

しかも日本の强味は鑛石が割合安く手に這るといふ事ばかりでなく、何といつても、勞働賃銀が安いところにあつて、割合能く働く勞働者が、非常に安い賃銀で働いてくれるといふ事が競爭上の武器となるのである。